

# 日野地域未来ビジョン 2030

## しあわせのタネを育てあう日野

2023(令和5)年 3 月

日野市

## はじめに

このビジョンは、2030年、そしてそれ以降について、日野に住む人々、日野に関わる様々な人々がどのようなふるまいをしていくことが望ましいかを共に考え、行動していくためのヒントとなるものです。

私たちは、私たちが暮らす日野、そして社会には今後10年間で後戻りできない大きな変化が訪れることを認めます。地域づくりも個の幸福感をどう高めていくかがカギとなっていきます。

このビジョンは、これから起こる変化を肯定的に受け入れ、私たち自身を変容させていくための一歩となるものであり、迷った際に立ち返ることができるものでもあります。

私たちは、異なるものがつながりあうことにより、より大きな力を得られることを過去の経験から学んできました。そのため、私たちは、いま日野に住まう人やこれから日野に住まう人だけでなく、日野に関わる人、関わろうとする人々と協力しあい、このビジョンの実現を目指して取り組みます。

ここに記載している方針は、それぞれがつながりあうものであり、分かちがたいものです。これは、持続可能な発展を目指し、我々の世界を変革することを宣言した SDGs(Transforming our world : the 2030 Agenda for Sustainable Development)において示されている「経済・社会・環境」の3つの側面のバランスを保ちながら進めることにもつながることになるでしょう。

# 1章 ビジョンが示すもの

「日野のまちには大自然はないけれど、すぐ手の届くところに水や緑がたくさんあります。(中略) まち全体が、まるで一つの大きな公園みたいな日野のまち。」(けやき出版(2013)たまら・び vol.81 日野市)

## (1) 日野のまちと人・暮らし

——「まち全体が、まるで一つの大きな公園みたいな日野のまち。」

2013年に発行された地域情報誌では、日野のまちと暮らしをそう表しています。

この100年、日野は時代の流れや人々のニーズに合わせてその姿を変えてきました。特に高度経済成長期以降は東京の郊外都市(ベッドタウン)として、コンパクトながらも丘陵や水域を抱く、多様性のある市域に多くの人を受け入れながら発展してきました。

住宅地と共存する豊富な自然を有する日野市ですが、日野で時間を過ごすようになると、自然の多くには人の手が入っており、暮らしと密接に関わっていることに気づきます。

街路樹の下に植えられた草花や隣家に囲まれた庭にある緑、自転車で風を感じながら下る坂道、多摩川の鉄橋を渡る電車の中から望むまちなみと富士山など、決して大自然ではありませんが、暮らしを豊かにするものの手触りを感じながら日常を過ごすことができるのが日野のまちです。

水や緑のみならず身近にあるモノやコトを楽しみ、価値や意味を見出してきたのが日野に住まう人々であり、日野らしさの土台にもなっています。また、企業や学校の存在が日野に住まう人や仕事をする人、関わる人を絶えず呼び込み、新たな取り組みや仕事を生み出すことにつながり、その積み重ねが私たちの暮らしに潤いをもたらしてきました。

## (2) 転換期を迎える日野

一方で、日野はこれまでの状況とは異なり、転換期のただ中にあります。これからの日野を考える手がかりとして、まちづくりの変遷や置かれている状況を確認していきます。

### ① 都市化の始まりから高度経済成長期(ベッドタウンの完成)

日野は戦前に集積した産業や人口が礎となり、第一次首都圏基本計画において、「職住近接の自立都市」を目指す第一号衛星都市として指定されました。しかし高度経済成長期以降、都市部の第三次産業へのシフトと集積が進み、日野市はその労働人口の住宅の受け皿となり、急激な人口の流入により、ベッドタウンとして住宅地化・都市化が進展しました。

日野の特徴のひとつは、戦前からの企業集積を維持し、住宅地だけでなく、工場や多数の大学と共存しながら発展してきた点にあります。戦前から戦中における軍需から民生産業への転換と合わせた人口増加と相乗的に発展してきた労働集約型産業の集積、産業技術の高度化による経済の発展がみられました。一方で限られた土地・都市空間の中で、住宅という土地利用と産業(工場)立地が近接化し、騒音や排水などの問題に起因する軋轢あつれきも生じてきました。

## ② 成熟期の社会へ(ベッドタウンに生じた課題)

1990年代以降、それまで継続してきた高度経済成長モデルの変化が表面化し、1995年には国内の生産年齢人口が減少、市内でも一部で工場の縮小・用地の売却が始まりました。それらの一部が住宅化したことや、区画整理事業が進展したことによる住宅供給があり、人口がさらに増加してきました。市内企業においても、新規の技術人材の採用が減り、研究職の確保に比重が置かれはじめ、産業構造の転換が顕在化してきました。

2000年以降には社会全体が成長期から成熟期に入り、高度経済成長期に同時に流入した世代の急速な高齢化が進展しました。また、この時期に整備された住宅地や団地の老朽化の問題、さらには企業の縮小・撤退も相次ぐなど、ベッドタウンに潜在する様々な課題が表面化するに至りました。

## ③ 2010年代に生じ始めた変化(ベッドタウンからの転換)

2010年代には、ベッドタウンの抱える課題が深刻化、加速化しました。日野では2007～2010年の世界金融危機の影響を受け、2011年前後に市内の工場の移転・撤退が相次ぎ、地域経済への大きなインパクトとなりました。これは製造拠点機能の海外移転や国内での集約化を理由としたものですが、都市化・ベッドタウン化の中で製造業の操業環境としての立地メリットが低下してきたこともその一つの要因となったと考えられます。

日野市では2013年に施策の基本理念として「諸力融合」を掲げ、2017年には地方創生の新たな施策として「生活課題産業化」など官民連携による社会課題への取り組みや、住民および地域の団体などとの対話の場である「リビングラボ」の実施など、地域との対話を通じた共創を目指す動きを始め、また2019年にはその取り組みを反映させた計画により、東京都では初のSDGs未来都市に選定されるなど、ベッドタウンからの転換(「ポストベッドタウン」)を目指す動きも活発化しました。

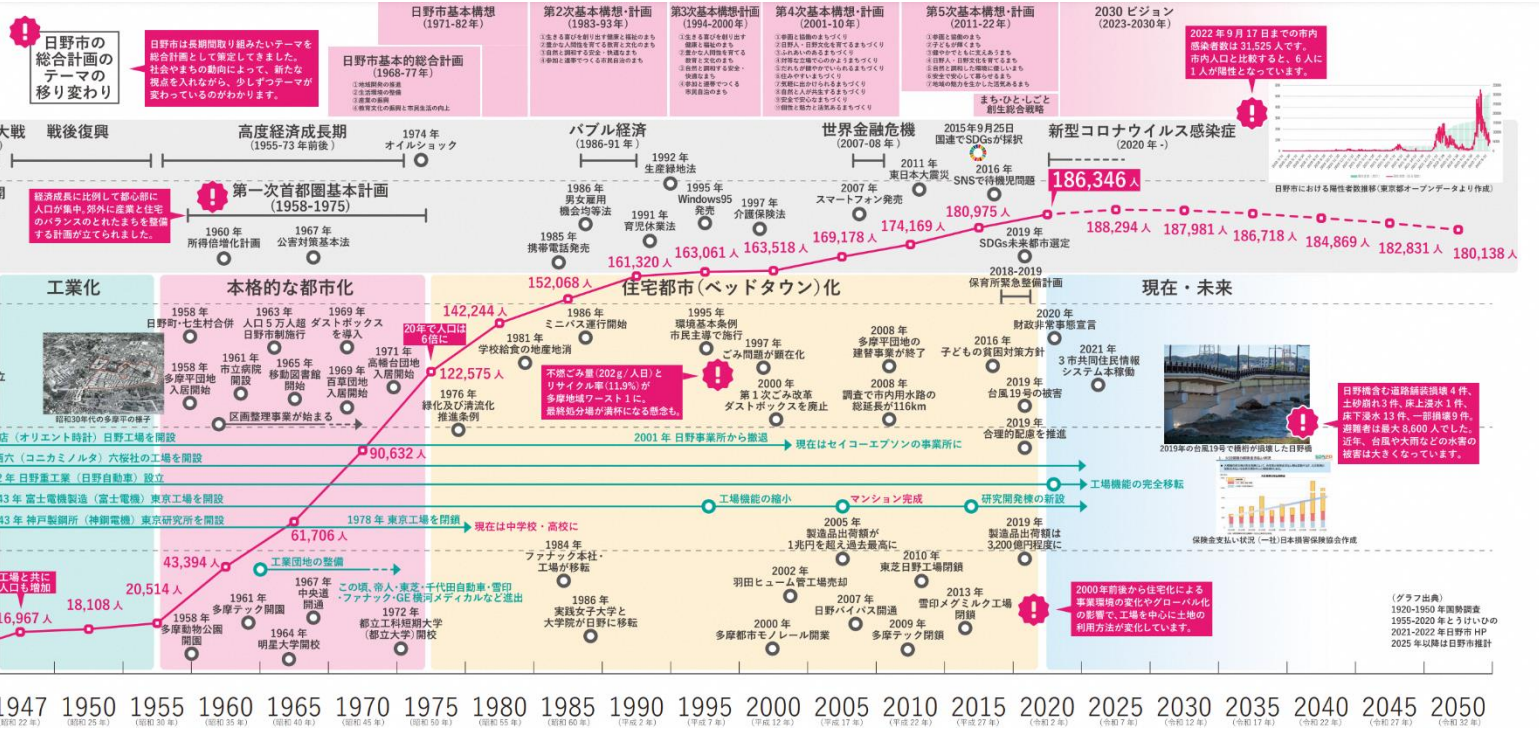
## ④ 不確かさを増す未来と価値観の多様化

近年特に進展したグローバル化とデジタル化は世界や人々の距離を近づけ、新たなコミュニケーションを生んできました。豊かな暮らしを支える食やエネルギーは享受しやすくなる一方で、地球規模の大きな変化が日野に住まう私たちの暮らしにも直接的に影響を与えるようになってきました。この結果、公正な労働や人権への対応、土地の利用と水源の涵養、生物の多様性、格差の拡大、地域に根差す文化の尊重などにも注目が集まりやすくなっています。また、気候変動の進展により災害が激甚化し、私たち自身の生活にも多大な被害が出るなど、未来の不確かさが増えています。

私たち自身に目を向けると、ライフスタイルの個別化や価値観の多様化が進むとともに、複雑な問題への多面的なアプローチが求められる中で、多様性や社会的包摂・共生の視点を持つことは、もはや必須の素養です。また、SNSなどデジタル技術の普及により、個人が持つ力を活かしやすくなってもいます。

SDGsが示すように、それぞれの取り組みや目標がつながり合い、関連していることを前提として、異なる分野が共に協力して活動する協働・共創を実現していくことに注目が集まっています。

# 日野100年表



日野市企画経営課(2022) 日野100年表<sup>1</sup>



<sup>1</sup> データ版については日野市HPにて掲載している。上記QRコードからもアクセス可能。  
[https://www.city.hino.lg.jp/res/projects/default\\_project/page/001/020/200/y100.pdf](https://www.city.hino.lg.jp/res/projects/default_project/page/001/020/200/y100.pdf)

### (3) 計画からビジョンへ

今後私たちが生きる社会では、これまでと同様に社会・経済が維持されることは難しいといえます。計画づくりにおいても、状況が常に変化することを前提としたものにしていく必要があります。

#### ① 基本的な考え方

「日野地域未来ビジョン」は、日野のまちがたどってきた変遷や社会背景、私たち自身が2030年に起きていてほしい変化とは何かを基にして、私たちで向かっていく大きな方向性を共有するものであり、その時々とその現場において活動していくための指針です。

2030年、そしてそれ以降について、日野に住む人々、日野に関わる様々な人々が豊かに生きる上で、どのようなふるまいをしていくことが望ましいかを共に考え、共に創ることが大切です。また、今日のような時代の転換期においては、状況や課題の移り変わりが早く、明確な将来像を描き切ることが困難になっています。絶えず状況が変化することを前提に、小さく進み、状況に応じて作り変えていくことで、複雑で困難なさまざまな課題にも対応していくことが求められています。そのためには、確固たる正解が見えない中でも、自ら考え、道を見つけて歩もうとすることや、変化や脅威、社会の要請に応じてしなやかに対応していく必要があります。

#### ② これまでの長期計画との違い

これまでの長期計画は市が中心となりまちづくりをしていく際の目指す姿として将来都市像を掲げ、主に行政が10年かけて取り組む施策内容を列挙するものでした。経済や社会の変化、環境問題など不確かな未来、価値観の多様化、複雑な問題への多様なアプローチなどに対応していくには、日野に住まう人や通勤・通学などで日野に関わる人、行政など異なる立場の人が課題理解を深め、新しい解決策と価値を共に創っていく必要があります。

そのため、本ビジョンでは、2030年に市民や企業、行政など、日野に住まう・関わる私たちが共に実現したい未来像や大切にしたい価値観を表すものとして「しあわせのタネを育てあう日野」を提示しています。これは、私たち自身がこれからの時代を自分らしく生きていくための手がかりになるものです。そのために分かち合っていて考えていくための問いと、問いとアクションを考える際のヒントを行動指針として整理しています。これは、行政における今後の取り組みの方向性を明確にする役割も担います。

#### ③ 本ビジョンの位置付け

「日野地域未来ビジョン」は「第5次日野市基本構想・基本計画」の後継として位置付けます。本ビジョンは市役所のみならず地域や日野のまちに関わる方、関わろうとする方が豊かに暮らしていくためのよりどころとなることを目指していることから、日野における施策の総合的な方針を示すものでもあります。本市における取り組みは、本ビジョンに基づいた戦略を定めるとともに、プロジェクトとして設定・推進していくことにより、ビジョン全体を先導していきます。

## 2章 ビジョンができるまで

「誰でもいつからでも自分の想いをもとにデザインできるように」「公園は食べられる木で埋め尽くされた公園になる」「誰でも地域のネットワークに自然に関わっているようなオープンな街であってほしい」「必要なことを自分たちで作りだす“セルフサステナブル”」(日野市 ヒノタネプロジェクト(2022)「あなたが思う2030年に「こうなったらいいな」「こんなことに取り組みたいな」という日野への願いは?」「将来の日野にふさわしいコンセプトを考えよう」より)

### (1) ビジョン開発にあたって

これまでとこれからを踏まえながら、地域未来ビジョンをつくってきたプロセスについて確認していきます。

#### ① これまでとこれから

これまでには経済成長期に国全体が発展する中で形成された中央集権的な社会構造のもと、行政が地域づくりの主体となってきました。経済・効率優先のライフスタイルを重視し、会社員の夫、専業主婦の妻、子ども二人の核家族が標準的な家族像とされた社会であり、行政もこうした背景を前提として公共サービスを提供してきました。

しかし、前章で見てきた通り、日野も時代の変わり目にあります。地域未来ビジョンの策定プロジェクトにおいても、自然や文化との共生や年代や肩書きによらない関わり、協調を望む声が多く上がりました。これは、一人ひとりが持続可能な生活、社会を重視したライフスタイルを選択するようになり、多様な人にとって暮らしやすく、活かしあうことができる社会が地域に根付きつつあるとも言えますし、地域や家族、あるいは個人を平均像で語るができない多元的な社会が訪れているとも言うことができます。

これからは、私たち自身が望む姿は何かを模索し、描いていくことが求められており、既にそうした取り組みも始まっています。

例えば、超高齢化社会における持続可能な地域生活を支える仕組みである地域包括ケアシステムにおいては、「地域ごとに住民が望む地域の姿を描き、そのための仕組みづくりやサービスづくりに参加し協働して地域づくりを進めること」を地域デザインとして定義し、行政において注力すべき機能として位置付けています。<sup>2</sup>

また、さまざまな声を既存の業務課題に結びつけて取り上げるだけでなく、声を活かして生活や仕事のあり方を大きく変える発想も求められています。経済や経営の分野においては人や暮らしといった人間生活そのものを中心に据え、「どんな嬉しさがあるか」「どんな価値があるか」を考えてモノやサービスを考える人間中心設計(Human-centered Design<sup>3</sup>)が取り上げられるようになっています。

<sup>2</sup> 地域の実情を踏まえた一人ひとりに寄り添う地域デザイン。(出典:三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社(2019) 地域包括ケアシステムの深化・推進に向けた制度やサービスについての調査研究報告書)

<sup>3</sup> モノを作り手側でなく、使い手側の目線から設計するプロセスや考え方を指す。(出典:経済産業省(2019)高度デザイン人材育成の在り方に関する調査研究報告書 p.82)

## ② 策定プロジェクトで目指したもの

地域未来ビジョンの策定においては、「各々の現場で使える」ことを重視し、具体的な手法の開発を行いました。第一に関わる方がどれほど主体的に考えられるか、参加できるかが重要だと考えました。そのため、サービスを受ける市民と提供する行政という関係性を前提とするのではなく、多様な主体が日野に関わる一人として参加・参画することの誘発と対話の場づくりを行うこととしました。

これらを踏まえ、地域未来ビジョン策定の取り組みは策定を行う日野市に關係のある市民、職員、多くの人が未来に目を向けるきっかけをつくるものであり、未来に花咲くタネをまき、その実践を行うためのプロジェクトとして策定プロジェクトを定義し、「ヒノタネプロジェクト」としました。

ヒノタネプロジェクトでは、相互に考えを共有しながら目指すべき日野の姿を探索していきました。以下に意識して取り組んだプロセスについて記載します。

(これまで取り組まれてきたプロセス)

**前提** 一部では協働の取り組みが行われているが、行政が地域づくりの主体であり、サービスを受ける市民と提供する行政の關係性。

**対応** まちづくりの柱やたたき台を行政が用意し、市民に意見を出してもらう。出された意見を整理・分類して調整する。

**前提** さまざまな声を既存の業務課題に結びつけ、公共サービスの充実・改善を図る。

**対応** 市民の意見を聞き、柱や取り組みの磨き上げを行う。

(今回意識して取り組んだプロセス)

**前提** 私たち自身が望む姿は何かを模索し、描いていくために、多様な主体が日野に関わる一人として参加・参画する關係性。

**対応** これからの視点とは何かを考え、ありたい姿を相互に出し合いながら目指すべき姿を定義していく。なぜこう考えるかプロセスについても見せ合う。

**前提** 「どんな嬉しさがあるか」「価値があるか」を考え、声を活かして生活や仕事のあり方を変える。

**対応** どれをより重視していくのか、方向性を決めるところに意見を反映する。具体的に考えるためのヒントとなる行動指針や問いを一緒につくる。

## (2) 具体的な取り組み

ヒノタネプロジェクトでは、相互に考えを共有しながら目指すべき日野の姿を定義し、そこへ向かっていくためのヒントとなる行動指針と問いを設定していきました。そのために考えたことは「日野ってどんなまち？」「未来の日野はどんな姿がいい？」「そのためにみんなで共有したい行動指針は？」「自分が今できることは？」の4つです。これらについて、以下の取り組みを行う中で検討を進めました。



### ① ヒノネタウンミーティング

地域視点でのビジョン開発として実施しました。全 5 回のタウンミーティングには、延べ 474 名が参加し、日野の過去から現在を捉え、未来の日野を考えました。「未来につなぐ創造力プロジェクト」に参加した中学生など若い世代も参加し、大人との対話の中で未来を考えていく姿もありました。

実施時期 2022 年 9 月 25 日、9 月 30 日、10 月 22 日、11 月 13 日、12 月 20 日  
参加者数 474 名(延べ人数)

### ② 職員向けヒノネタウンミーティング

行政視点でのビジョン開発として実施しました。全 3 回のタウンミーティングには、延べ 85 名が参加し、日野の過去から現在を捉え、未来の日野を考えました。

実施時期 2022 年 9 月 30 日、10 月 14 日、11 月 10 日  
参加者数 85 名(延べ人数)



### ③ 市民意識調査(16 歳以上)

市政全般のほか、健康や人とのつながり、経済などウェルビーイング<sup>4</sup>の視点から暮らしの状況や活動量を伺うアンケート調査を行いました。これまでの市民意識調査は対象者が 18 歳以上でしたが 16 歳以上に引き下げたことで、後述する小中学生向け調査と併せて幅広い年代に接点を持つことができました。

実施時期 2023 年 1 月 19 日～2 月 7 日  
回答数 674 名 ※2023 年 1 月 31 日時点  
対象 16 歳以上の日野市民 3,000 名(無作為抽出)

### ④ 市民意識調査(小中学生向け)

これまでの市民意識調査では調査対象外であった小中学生を中心としたアンケート調査を実施しました。未来の自分や日野、身近なまちへの認識についてたずね、約半数の方から回答を得ることができました。大人と比較すると安全安心や平和、SDGs の視点多いという傾向があり、ここで得られた言葉も一つの意見としてビジョンのありたい姿に盛り込みました。

<sup>4</sup> 英語で Well-Being。「しあわせ」「満たされた状態」と訳される。富山県では「GDP のような客観的な経済指標から、一人ひとりの主観的な幸福指標へと、社会のものさしが変わってきている」という認識の下、ウェルビーイングを「自分らしく幸せに生きられること」、「収入や健康といった外形的な価値だけでなく、キャリアなど社会的な立場、周囲の人間関係や地域社会とのつながりなども含めて自分らしくいきいきと生きられること」と定義し、2022 年 2 月に策定した成長戦略に位置付けている。

実施時期 2022年10月14日～10月31日  
回答数 3,634名(回答率50.4%)  
対象 小学校5年生～中学校3年生 7,203名

#### ⑤ 市民・団体・職員インタビュー

市民や団体、職員など個人の思いをさらに捉えるために、サークルの集まりや職場、サロン、学習塾、打ち合わせなどの場に伺ってインタビューを行いました。タウンミーティングとは異なる雰囲気の中で、それぞれの立場から見た日野についての思いを知ることができました。

実施期間 2022年7月13日～2023年1月31日  
回答数 217件

#### ⑥ SNSや広報コラムでの情報発信・共有、プロセスの共有

日野らしさを捉えて深く考えるとともに、多くの方に共感してもらうことを目的とした情報発信を行いました。人や暮らしに着目し、日野市で自分のため、誰かのため、まちのために何かしようとする人を取材し、クリエイターSNS「note」を活用して発信しました。広報では日野で若い世代に親しみを持ってもらうために、「ファンをつくる」をキーワードに職員自身の言葉を使ったコラムで発信しました。

(note)	記事掲載	6本 ※2023年1月31日時点
	エンゲージメント数	494(いいね、オススメ、コメント数の合計)
(広報ひの)	コラム出稿	毎月1回(2022年6月～2023年3月)
	アンケート回答数	103名

#### ⑦ 策定プロセスの共有、市民同士の対話のきっかけづくり

タウンミーティングに参加できない方も後から策定過程を知ることができるように、オンラインホワイトボード miro を活用して記録を公開しました。事務局の検討プロセスについても記載しています。また、策定の経過などをまとめたダイジェスト版の動画を作成し、YouTube で公開しています。

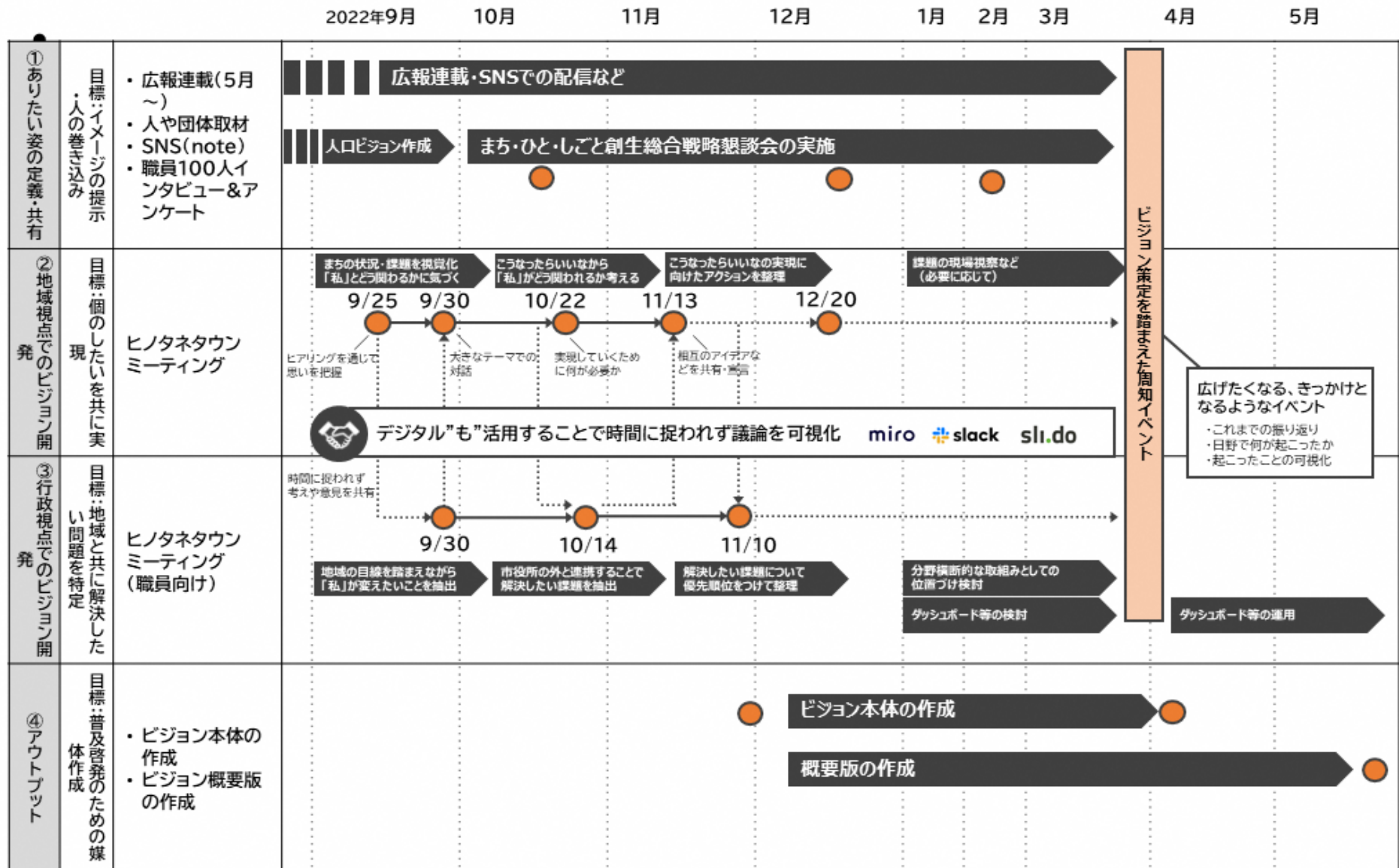
パブリックコメントではリアルタイム質問ツールの Live!アンケートを実験的に運用し、リアルタイムでどんな意見が寄せられるかを見えるようにしました。

(miro)	作成	公開
(YouTube)	再生回数	187回 ※2023年1月31日時点
(Live!アンケート)		実験的に運用

### (3) 地域視点と行政視点のミックス

ビジョン開発と対話の場であるワークショップは参加対象者を限定しない市民向けタウンミーティングと、行政職員を対象とする職員向けタウンミーティングを別途開催しました。

これは、地域視点でのビジョン開発と行政視点でのビジョン開発を同時並行で行っていくことで、双方がより自分らしい態度で主体的に考える機会とすることを意図しています。また、各回で得られた内容は双方で共有し合うなどのフォローアップを行いました。



ヒノタネプロジェクトにおける主なスケジュール

### 3章 現状把握(As-Is)

「子どもが遊べる場所がたくさんある町であってほしい!」「食料自給率を上げるために地産地消を進めていく」「病院に行く人がもっとも少ない街に」「空き家を活用したタウンファームでレタス作り。障害者雇用。」(日野市 ヒノタネプロジェクト(2022))

#### (1) 行政によるこれまでの施策・取り組み

これまで見てきた通り、本ビジョンでは相互に考えを共有しながら目指すべき日野の姿を定義し、行動指針と問いを設定するものとしています。本章以降はありたい姿(To-Be)と現状(As-Is)について検討していきます。現状を捉える手がかりとするため、まず、本ビジョンの前計画である第5次日野市基本構想・基本計画(2020プラン)の取り組み状況について確認した後に、改めて遠い視点と近い視点から日野というまちの現状(As-Is)について確認していきます。

#### (2020プランについて)

計画名	第5次日野市基本構想・基本計画(通称:2020プラン)
計画年次	2011年4月~2021年3月(2023年3月まで延伸) 新型コロナウイルス感染症の影響により計画期間を延伸
将来都市像	ともに創ろう 心つながる 夢のまち 日野 ~水とみどりを受けつごう~
まちづくりの柱	参画と協働のまち、子どもが輝くまち、日野人・日野文化を育てるまち、自然と調和した環境に優しいまち、安全で安心して暮らせるまち、地域の魅力を活かした活力あるまち

#### ■ 柱1 参画と協働のまち

2020プランでは、その前身となる2010プランで示されたまちの姿や方針を引き継ぎ、さらなる市民参画・協働を目指す「公民協働<sup>5</sup>」を大きなテーマとして掲げました。

本市は1990年代以降に市民参加が進み、2007(平成19)年3月には「市民活動団体(NPO)と市との協働のための指針」を策定し、市民活動団体を中心とした参画と協働が進められてきました。2020プラン計画期間では、SDGs 未来都市の選定などもあり、これまでの市民活動団体に加えて企業や個人など多様な主体者との協働や共創が進みました。

多様性の分野では多文化共生に向けた取り組みが始まったほか、人権やワーク・ライフ・バランスなどの意識啓発が進みました。コミュニティ活動については、地域懇談会やNPO支援などの施策は新型コロナウイルス感染症の影響により活動が制限されましたが、オンラインの活用などで新しい活動の形が進みました。また、自治会活動については、加入率低下が続いています。

行財政改革については、経常収支比率や財政調整基金の残高などは目標値に達しておらず、早期の指標改善が求められる状況です。これまでの取り組みにおいては、大成荘の廃止や子育て施設を

<sup>5</sup> 地域の一員としての自覚と責任をもってまちづくりに携わる市民の方を「公のことを考える市民」と位置づけ、地域づくりのパートナーとして協働を深めていく考え方。

中心とした民営化等の実績も生まれましたが、2020年には財政非常事態宣言を発出しました。この宣言は早期に財務指標を改善していくことで持続可能な経営基盤を確保することを目的としており、実行計画として日野市財政再建計画・第6次行財政改革大綱実施計画に基づく取り組みを行っています。

また、2020年頃からデジタル化をきっかけとして事業や取り組みの大きな改革を目指すDX(デジタル・トランスフォーメーション)に注目が集まり、サービス全体の改革という視点から行財政改革や働き方改革とも連動し取り組んできました。

## ■ 柱2 子どもが輝くまち

2020プラン策定時には児童虐待やインターネット犯罪に子どもが巻き込まれる事件や学力低下が危惧されていました。そのため、家族、地域、事業者、行政が子育てを応援し子育てをするなら日野市であるというイメージが定着しているまちの姿を目指して取り組みを進めました。

2010年代は女性の就業率向上などを背景に共働き世帯が多くなり、保育園や学童保育、小学校低学年の子どもたちの居場所という課題が生まれました。そのため、保育所や学童保育所の新設・定員拡大、放課後子ども教室「ひのっち」の拡充などを行ってきました。

また、妊娠期からの一体的な支援を目指して子育て情報を提供する「ぽけっとなび」のアクセス数や市内23か所に設置している子育て相談窓口への相談件数も増加傾向にあり、多様な子育てニーズに応える取り組みを行ってきました。

また2019年には第3次学校教育基本構想を策定し、「すべての“いのち”がよろこびあふれる未来をつくっていく力」を子どもたちに身に着けてほしいと定め、この構想に基づき学校教育を進めています。

## ■ 柱3 健やかでともに支えあうまち

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、改めて健康の大切さ、医療体制確保の重要性が注目されました。2020プランにおいても市民一人ひとりが健康づくりや病気の予防を心がけるとともに、高齢者や障害のある人でも安心して暮らせるバリアフリーのまちを目指しました。

2018年に在宅療養支援課を設置し、住み慣れた地域で、安心して暮らせるための地域包括ケアシステムの構築に力を入れました。また、コロナ禍においても医師会をはじめ在宅医や訪問看護、介護などの関係多職種と共に情報共有や連携を行い、地域包括ケア体制を維持することができました。

## ■ 柱4 日野人・日野文化を育てるまち

人生を豊かにする文化活動を支えることも市の重要な役割という考えのもと、2020プランでは生涯学習やスポーツに親しみ、生きがいや楽しさを感じることができる人を「日野人(ひのびと)」と呼び、日野人が充実した人生を送れるようなまちを目指しました。

新型コロナウイルス感染症の影響で多くのスポーツイベントや生涯学習に関わる事業が中止となりましたが、コロナ禍以前は各イベントの参加者数も増加傾向でした。2017年には桑ハウス(旧農林省蚕糸試験場日野桑園第一蚕室)が国登録有形文化財の指定を受けたこともあり、施設や拠点を活用する取り組みが始まっています。

また、コロナ影響で当初より一年後ろ倒しとなりましたが、2021年には東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会が開催され、日野市においてもこれを契機としたスポーツ振興などを行ってきました。2022年4月には南平体育館が新規オープンし、地域全体に活気と潤いを生み出す、「まちなかアリーナ」としての活用が始まっています。

#### ■ 柱5 自然と調和した環境に優しいまち

日野市の誇るべき魅力として、豊かな水と緑を保護し、次世代へ継承することを目指しました。2019年には地域の居場所及び環境情報センターの機能を併せ持ったカワセミハウスが東豊田に新設され、学生や大学と連携したお祭りなども開催されています。

2020年4月には新可燃ごみ処理施設が稼働し、循環型社会を見据えた可燃ごみ処理体制が実現しました。それに合わせて、プラスチック類資源化施設を稼働させ、第2次ごみ改革と銘打ち、更なるごみ減量、リサイクルの推進を図っています。2020年度のリサイクル率は39.2%と2019年度より5%増加しています。

この10年間で、地球環境問題は大きな注目を集めており、日野市としても地球規模の課題として気候変動の解決に向けた取り組みが必要となっています。2020年には海洋プラスチックへの対策としてプラスチック・スマート宣言を行い、2022年には気候変動対策を産学官民のパートナーシップで取り組んでいくために気候非常事態宣言を行いました。

#### ■ 柱6 安全で安心して暮らせるまち

地球温暖化などの影響により、台風、大雨、強風、酷暑などの自然災害は年々頻度や強さを増しています。2011年3月に東日本大震災、2016年4月に熊本地震などが起こり、大規模災害に対する意識が強まりました。日野市においても2019年度の台風19号は、日野橋の損壊など大きな被害をもたらしたほか、約8,600人の方が避難されるなど、災害が地域社会・経済にも影響を与えている状況が深刻化しました。

また、生活を脅かす犯罪もインターネットを利用した巧妙な手口などがまん延しており、安全で安心して暮らせることに関しては行政としても万全の対策をしなければなりません。

東日本大震災などを契機として、災害がコミュニティにおける喫緊の関心事となる中で、避難所に女性の視点を活かすなど、災害に多様性を掛け合わせたセミナーなども行われました。防犯面でも地域の自助・共助が重要になってきますが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、防災出前講座や消防団員の訓練なども予定通り進行しませんでした。

#### ■ 柱7 地域の魅力を活かした活力あるまち

2020プランでは日野市の地域資源を生かし、自然環境、歴史文化、商業、工業、農業などがバランスよく成り立っている活力あるまちを目指した取り組みを進め、シティセールスの推進という視点から産業や文化、スポーツの振興、日野市らしさを対外にアピールしました。また、観光の視点から「新選組のふるさと」を強く打ち出し、2019年には「土方歳三没後150年プロモーション事業」を実施して市のPRを図りました。プロモーション事業では市役所としては初めてのクラウドファンディ

ング<sup>6</sup>を行い、目標額を上回る支援が寄せられるとともに、ひの新選組まつりでも過去最高となる約57,600人の来場がありました。一方で、新型コロナウイルス感染症の影響により、地域の魅力、コミュニティの重要性が再認識されるとともに、観光だけでなく市のPR方法も見直していく必要があります。

2015年に開設した多摩平の森産業連携センター<sup>プラットフォーム</sup>では、ビジネスを通じて新たな価値や事業を生み出そうとする事業者や創業者、産官学民金の連携を推進しています。消費行動の変化や技術の進展などに即した商業支援策を展開するため、2018年に「商業振興条例」を施行し、取り組みを進めています。

生産緑地の指定が一斉に解除されることが問題となった「2022年問題」や農業者の高齢化など都市農業を取り巻く環境が変化する中で、次世代に農業をつなぐために市内農業者の支援や新たな担い手づくりなどに取り組みました。

## (2) 新型コロナウイルス感染症における行政施策への影響

上記のように、日野市の長期計画に基づく取り組みは2020年以降の新型コロナウイルス感染症の影響により十分に実行できない、という状況も生まれました。そこで、コロナ禍が行政施策や地域にどのような影響を与えたかを検討していきます。

日野市では市民の命を守り、市民生活及び市内経済活動を支えていくための新型コロナウイルス感染症対策の取り組みを行ってきました。コロナ対策は国による新型コロナウイルス感染症対策地方創生臨時交付金などの財政支援を裏付けとして実施されてきましたが、一時的な支出増加は将来的な財政リスクにもなり得ます。パンデミックなどの突発的な災害時に行政機能が十分に発揮できないリスクは今後も残る可能性があります。

また、これまでの施策の成果にも関連し、地域の中での支え合いの状況なども見えてきました。新型コロナウイルス感染症への対応は、自治体ごとの考え方や判断が尊重されました。緊急事態宣言下では人の移動が止まり、これまでのつながりやコミュニケーションが失われるという課題も生まれました。行政主導でのサービスが中止となる中で、自主的なスマホ教室や教え合いのサポート、高齢者の外出促進、孤立や孤独への対応などが地域主体で行われました。

一方、暮らしという視点ではコロナ禍によりテレワークが進展し、働き方改革の推進も図られるなか、良好な自然環境の残る日野市は、職住接近のポテンシャルを増大させたといえます。例えば、需要が低下しつつあった比較的敷地規模の大きな戸建て住宅に若年層が入居する事例も出てきています。この背景として、もともと日野市は、人口減少の続く多摩地域にあって、人口微増を維持してきたことが指摘できます。ベッドタウンの時代にも、企業や大学の立地機能を、住宅地とともに維持し、また新たな都市機能を誘導するなど多機能のまちを維持してきたことが、結果的に日野のポテンシャルを高めることにつながっています。

---

<sup>6</sup> 群衆(crowd)と資金調達(funding)を組み合わせた造語。自分の活動や夢を発信することで、想いに共感した人や活動を応援したいと思ってくれる人から資金を募るしくみのこと。

### (3) 地域全体の中で何が変わってきたのか

ここまで、主に行政の施策や取り組みの単位から現状を見てきました。ここでは、少し引いた視点から日野のまちの現状について検討していきます。

#### ① 人口や企業活動の集積の状況

地域経済分析システム(RESAS)によると、2017年頃を境として二次産業における製造品出荷額が急減し、相対的に第三次産業の比率が高まっています。また、民間設備投資の額が減少するとともに、労働者一人当たり所得が低下しています。一方で全体での支出額は経年でもほぼ変化しておらず、民間消費については域内に留まる額が増加しています。

2010年代は人口減少の影響が明らかになり始めた時期でもあります。日本の総人口は2008年をピークに減少を始めました。2014年に日本創生会議が公表した消滅可能性都市の議論が呼び水となり、2015年は地方創生が叫ばれ、国においても地域が主体となる自立した取り組みを誘導していく流れにあります。

地方創生は東京への人口の一極集中を是正することを目的としており、移住や少子化対策、経済対策とも関連して実施されてきました。こうした中、2021年中の東京区部の人口が26年ぶりに減少となりましたが、2022年中には再び増加に転じました。あくまでもコロナ禍による一時的なものと考えられ、東京都心への人口集中という現象はなお続くことが伺えます。

日野市においては2011年からの10年間で約10,000人の人口増加となっていますが、区部と比較すると増加幅は鈍化傾向にあります。2022年には死亡数の増加などにより、22年ぶりに人口減少となりました。

2023年からの数年間は大規模マンション建設等の影響による社会増を理由として、再び人口増加に転じることが予測されますが、以降は2030年頃を境に継続的に減少していくものと推測しています。

また、2010年代には、市内生産拠点に付随していた研究開発機能が強化されました。製造業が変容し情報産業との融合も進んできており、市内の企業もクラウドサービスやAIプラットフォームに参入していることから好機となる可能性があります。また、高齢化の進展の中、好調なヘルスケア産業の集積も進んでいます。

#### ② 個人の変化

地球温暖化の影響を受けた相次ぐ自然災害や、新型コロナウイルス感染症の打撃を受け、持続可能な社会づくりへの関心や必要性に対する理解がさまざまな間で高まっています。こうした個人の変化が、日野で起き始めている取り組みを後押しすることにつながっていく可能性があります。

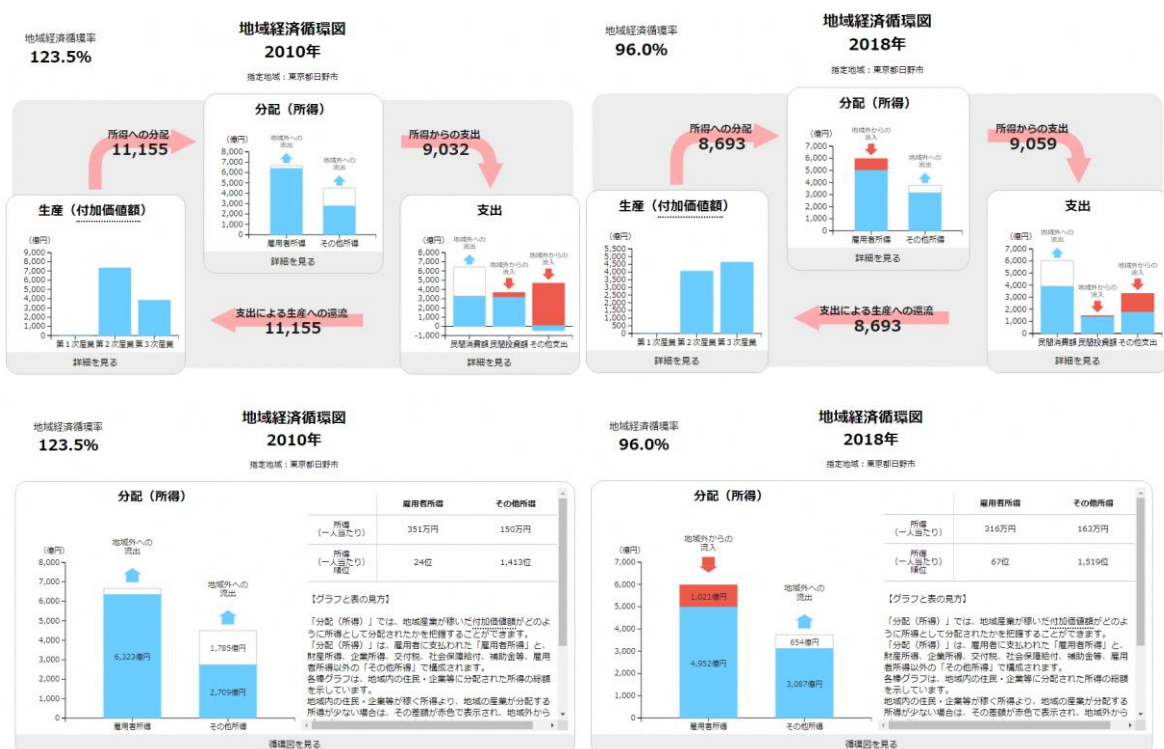
日野宿通り周辺「賑わいのあるまちづくり」プロジェクト実行委員会が主体となり活動しているキョテン107では、2014年からチャンネル・マーケットなどの取り組みを行っています。チャンネル・マーケットではカラフルな色遣いのクリエイティブデザイン、オーガニック、ライブ、アートなどを取り入れ、日野駅前や仲田の森蚕糸公園などの身近な場所を個性的な空間として彩り、実施しています。このイベントはまちづくりを目的として行っているのではなく、企画者自身が楽しんでいることがポイントです。多くの人の共感を呼び、市内でも同様の取り組みが行われるといった循環が生まれていま



す。

また、行政においても、2021年度から始まった「まちと空き家の学校」では、コロナ禍をきっかけとして、より身近な地域のことを知りたい、自分らしく関わりたいという方が多く参加しています。こうした関係づくりの中から、まちの資源として空き家を活用していくための試行的な取り組みが始まっています。

こうした現状を踏まえると、行政が主導してまちづくりを進めるこれまでの社会のあり方を見直し、一人ひとりの暮らしから生まれる課題を地域で共に解決していくために、それぞれが持つノウハウやネットワークが結びつき、新たな取り組みを生み出していくことの重要性が高まっているとと言えます。



内閣府・経済産業省 RESAS 地域経済循環図(2010年・2018年比較) <sup>7</sup>

<sup>7</sup>循環図の分配で見切れている【グラフと表の見方】について以下に記載します。

「分配(所得)」では、地域産業が稼いだ付加価値額がどのように所得として分配されたかを把握することができます。

「分配(所得)」は、雇用者に支払われた「雇用者所得」と、財産所得、企業所得、交付税、社会保障給付、補助金等、雇用者所得以外の「その他所得」で構成されます。

各棒グラフは、地域内の住民・企業等に分配された所得の総額を示しています。

地域内の住民・企業等が稼ぐ所得より、地域の産業が分配する所得が少ない場合は、その差額が赤色で表示され、地域外から所得が流入していることを意味します。

逆に、地域内の住民・企業等が稼ぐ所得より、地域の産業が分配する所得が多い場合は、その差額が空白の四角で表示され、所得が地域外に流出していることを意味します。

上記の表は、従業員一人当たり雇用者所得及び人口一人当たりその他所得を表で把握することができます。

表に記載されている順位は、都道府県単位では全国47都道府県、市区町村単位は全国1,719市区町村におけるランキングとなっています。

## 4章 実現したい価値観・未来像(To-Be)

「ジェンダーも年齢も経験も関係ない、それぞれがそれぞれを”活かせる”街」「他の市や県との交流が活発であってほしい」「やりたいことができる！自己実現率NO1のまち。“ワクワク”するまち」「息子がボーイスカウトに参加し、多摩の木の立ち枯れやいろいろな問題を知ることができました。日野の自然がいつまでも大切に守られるような生活をしていきたい。」(日野市 ヒノタネプロジェクト(2022))

### (1) しあわせのタネを育てあう日野

人は誰もがよりよく生きることを願っています。しあわせは個人の意志に基づき、選択を行っていくことでもあります。

ヒノタネプロジェクトではさまざまな立場の方から未来への思いを共有していただきました。しあわせのタネを育てあうという言葉には、一人ひとりの未来への思いをタネになぞらえ、個人の意思に寄り添い、今この時から自分も共に育てていくという意味を込めています。

本章では実現したい価値観・未来像を確認していきます。まずビジョン全体のイメージを示した後、個々のありたい姿(To-Be)についてみていきます。

(実現したい価値観・未来像)

しあわせのタネを育てあう日野

(ありたい姿＝未来に咲かせたい花)

1. 使うものも買うものも、意識しなくても環境にやさしいまち
2. みんなで協力しあう、ごみゼロ日本一のまち
3. 水やみどりが日々を豊かにしているまち
4. 自分の何気ない取り組みがまちの Good につながるまち
5. 環境にやさしく、住むことが誇りになるまち
6. 自分の暮らしの背景を理解し、暮らしに必要なものをつくれるまち
7. 誰もが当事者として考え、意思決定に参加できるまち
8. 年齢に関係なく自分の活動を実践できるまち
9. 共に創る、地域情報が飛び交う賑わいのまち
10. 顔の見える、一人ひとりが自分を活かし、認め合う共創のまち
11. 自分と他者が生きている、生きてきた背景を認め合えるまち
12. まちと企業が結びつき、暮らしの中からイノベーションが生まれるまち
13. プライベートと仕事が相乗効果を生み出す、職住近接の刺激を感じられるまち
14. 新しいものも古いものも取り入れながら、日野らしさが続いていけるまち
15. 三方よし!の関係から新たなコトが生まれるまち
16. 未知をおもしろがり、探求できるまち
17. 何があっても、何とか働き続けられるまち

- 18.気軽に集う居場所、コミュニケーションのあふれるまち
- 19.心地よい居場所、住み続けたいまちを自分たちでつくるまち
20. 居場所に集う人も集わない人も、認め合えるまち
- 21.地域で人と人との関わり合いが実感できるまち
22. 適度な距離でいろんな人が好きなことをやっているまち
23. デジタルで利便性アップ、職員の顔が見える笑顔の市役所があるまち
24. 知ると思わず参加したくなる〇〇があるまち
25. 暮らしの余白が価値を生み出すまち
26. 自分の住むまちと暮らしに納得して誇りに思えるまち
27. ローカルな出会いから好きを発信できるまち
28. 人を気づかいながら言いたいことを言えるまち
29. 未来へのやさしさを誇りに、誰もが安心して学び・学びあい、歩んでいけるまち

(問い=自分でできることを考えていくための問いかけ)

- ・ 個々の背景を知ることができ、リスペクトし合える地域とは？
- ・ 市役所と地域がよりよい信頼関係をつくっていくには？
- ・ 地域に価値を生み出す協働の仕組みとは？
- ・ 地域で多様なかかわりあいの生まれる、適度な距離感のコミュニティや居場所とは？
- ・ 日野のことを好きと言える人を増やすには？
- ・ 変化を前向きにとらえ、自分のものにするには？
- ・ デジタルでみんながもっと便利になり、コミュニケーションを深めるには？
- ・ 自分の知らないものにもっと出会えるには？
- ・ 次世代につなげていきたい暮らし(サステナブルな暮らし)を実現していくには？
- ・ 自然を楽しみ、普段の暮らしをもっと豊かにするには？
- ・ 未来へのやさしさを誇らしいと思えるようにするには？
- ・ やりたいことが実現しやすくなるまちにするには？
- ・ 必要なものを自分たちでつくりやすくするためには？
- ・ 自分に合った関わり方を見つけやすくするには？
- ・ 自分らしいと思える暮らしに近づくには？
- ・ 働きやすく、働き続けられるまちを実現するには？
- ・ ちょっとしたことが持続できるようになっていくには？

(行動指針=問いかけを考えるにあたっての日野らしいヒント)

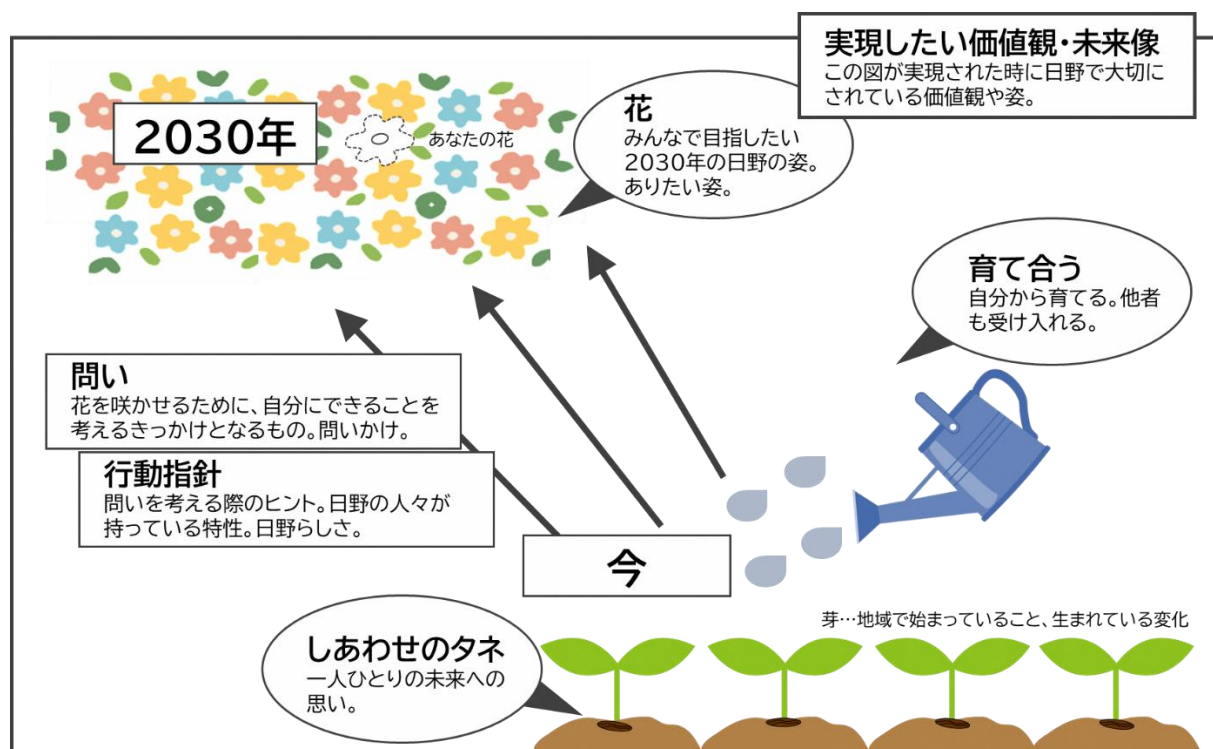
- ・ 未知をおもしろがる
- ・ 自分らしく働き続けられる
- ・ ごちゃまぜの場を増やす
- ・ 自分たちでつくる

## (2) 次の世代につなげる言葉の定義と概念図

1章で示した通り、「日野地域未来ビジョン」は、市民と市役所が2030年に共に実現したい日野の未来像や価値観を表すものとして「しあわせのタネを育てあう日野」を提示しています。これは策定プロセスで得られた参加者個人が考える未来に咲かせたい花(=ありたい姿)が結実した姿を現しています。

ありたい姿とは、2030年の日野における暮らしや仕事、活動の場などで実現してほしい未来の市民の生活環境とも言えます。このありたい姿と前章で確認した現状の間にはギャップがあることが考えられるため、ギャップを埋めていくことが大切です。本ビジョンでは、ギャップを埋める際に考え続けていくための手がかりとして問いを設定しています。

そして、暮らしや仕事、活動の場などの現場において問いとアクションを考える際のヒントとして行動指針を設定しています。行動指針の一つひとつの言葉は一般的なものですが、これらが同時に存在するのが日野らしさであり、日野の人が共通して持っている価値観をあらわすものとも言えます。



## (3) 地域未来ビジョンのコンセプト

### ① ありたい姿(花)

2030年に持続可能で、ウェルビーイングを実感できる日野市が実現した時に、どんなことが起きているといいでしょうか？現在の市民の思い(タネ)や動き始めていること(芽)が、2030年に花咲いた状況で何が起きているのか、こうなっていたいという市民、職員の声をもとにまとめました。

1. 使うものも買うものも、意識しなくても環境にやさしいまち

環境負荷が高い/低いを選ぶのではなく、環境負荷が低い行動やサービスが当たり前になり、特別に意識しなくてもよくなっている。

## 2. みんなで協力しあう、ごみゼロ日本一のまち

ごみ量が全国2位（2020年度）であることを知らない方が多数。それぞれが工夫しながらも地域の共通目標として1位を目指そう！

## 3. 水やみどりが日々を豊かにしているまち

東京の中で豊かな自然環境。自然を守るだけではなく、暮らしや生活、アクティビティに積極的に活かしていくことで普段の暮らしがもっと豊かになっていく。

## 4. 自分の何気ない取り組みがまちの Good につながるまち

自分や仲間の間でいいなと思ってしたことが、まち全体にもつながっていく。

## 5. 環境にやさしく、住むことが誇りになるまち

日野というまちで暮らすことが環境にやさしく、みんなが誇りに感じている。

## 6. 自分の暮らしの背景を理解し、暮らしに必要なものをつくれるまち

持続可能性を自分たちでつくる。自分の暮らしに必要なものは何かと考え、不可欠なものを自分たちで協力しながら作っていく。

## 7. 誰もが当事者として考え、意思決定に参加できるまち

性別や障害の有無にかかわらず、誰もが場に参加することができ、当事者の視点が反映される。

## 8. 年齢に関係なく自分の活動を実践できるまち

年齢や肩書に関わらず、フラットな関係性の中で、自分のしたいことにチャレンジ/誰かのしたいをフォローしやすくなっている。

## 9. 共に創る、地域情報が飛び交う賑わいのまち

リアルでもデジタルでもにぎわう。話したいことやここだけ！の話題が日野に関わる人の間で垣根なく、活発に共有されている。

## 10. 顔の見える、一人ひとりが自分を活かし、認め合う共創のまち

相手の顔が見えることで身近に感じられる。個々を活かしあいながら、共に未来を創っていくことができる。

## 11. 自分と他者が生きている、生きてきた背景を認め合えるまち

個々の思いや背景を安心して共有できるようになっている。

## 12. まちと企業が結びつき、暮らしの中からイノベーションが生まれるまち

産業（しごと）と暮らしの近さを活かすことで、新たな視点やアクションが生まれやすい。

## 13. プライベートと仕事が相乗効果を生み出す、職住近接の刺激を感じられるまち

地域のコミュニケーションやつながりが仕事にも良い影響を与え、刺激を得ることができる、職住近接の良さを感じることができる。

## 14. 新しいものも古いものも取り入れながら、日野らしさが続いていけるまち

これまでの伝統を守るとともに、これからの伝統をつくっていく。「今ここにある」を大切にすることで、人間中心の取り組みが生まれている。

## 15. 三方よし!の関係から新たなコトが生まれるまち

「売り手よし・買い手よし・社会よし」の精神を大事にしていくことが信頼感を生み、結果的に新たな

取り組みや活動が生まれやすくなっている。

#### 16. 未知をおもしろがり、探求できるまち

学びを中心に「未だ知らないこと」を楽しもうという人がつながり、個々の興味・関心から課題や社会を探索できるようになっている。

#### 17. 何があっても、何とか働き続けられるまち

長い人生の中で、例えば病気や障害があっても、子育てや介護があっても、理解やサポートを得ながら自分らしく働き続けられるようになっている。

#### 18. 気軽に集う居場所、コミュニケーションのあふれるまち

どんな人にとっても、誰にとっても安心して集まれるような居場所や関わり合いが自然と生まれている。

#### 19. 心地よい居場所、住み続けたいまちを自分たちでつくるまち

今ほしいのは、小さくても自分にじっくりくる場所。そうした居場所を自分や仲間ですり変えていって試行錯誤しながらもつくっていくことができる。

#### 20. 居場所に集う人も集わない人も、認め合えるまち

さまざまな人生や価値観がある中でも、緩やかにつながり合い、ほどけ合うことができる。

#### 21. 地域で人と人との関わり合いが実感できるまち

身近にどんな人がいるか感じられる。

#### 22. 適度な距離でいろんな人が好きなことをやっているまち

何かをやる/頼ろうとした場合、親しい方が良いときも、親しくない方が良いときもある。時にはおせっかいやちょっかいをかけながらも、さまざまな好きなこと、得意なことできている。

#### 23. デジタルで利便性アップ、職員の顔が見える笑顔の市役所があるまち

デジタルを使いこなすことがコミュニケーションの質をあげることにつながる。顔が見えやすくなり、仕事の質も信頼性もUPしている市役所がある。

#### 24. 知ると思わず参加したくなる〇〇があるまち

自分が住む/関わっているまちのメンバーが楽しそうであることが嬉しい。知ると思わず仲間になりたくなるような取り組みや場が増えている。

#### 25. 暮らしの余白が価値を生み出すまち

日野市は暮らし（家・学校）や仕事（企業など）が点在している。その間を埋めるのではなく、間にあるものを見つめ直し、うまく付き合っていくことが日野らしい暮らし（ライフスタイル）であり、何かを生み出す余白がある。

#### 26. 自分の住むまちと暮らしに納得して誇りに思えるまち

よそと比較・評価するのではなく、今ここに意識を向け、自分の周りにあることと丁寧に関わっていくことがまちと自身をつなぎ、誇りにもつながる。

#### 27. ローカルな出会いから好きを発信できるまち

自分が好きだと思うローカルなひと/ことを、もっと気軽に発信することがポジティブさや寛容さを生み出している。

#### 28. 人を気づかいながら言いたいことを言えるまち

自分も相手も大事にし、自分の気持ちを伝えられる。

#### 29. 未来へのやさしさを誇りに、誰もが安心して学び・学びあい、歩んでいけるまち

このまちで生きていくことを誇りに感じながら、自分らしく学びあっていくことができる。

## ② 問い(花を咲かせるために、自分にできることを考えるきっかけとなるもの。問いかけ。)

2030年の自分や日野がこうなっていたい、というありたい姿に近づけるために、2030年までその時々、暮らし、地域活動、市役所のそれぞれの活動において考え続けていきたいこと、考えるきっかけとするための問いかけをまとめました。

- ・ 個々の背景を知ることができ、リスペクトし合える地域とは？
- ・ 市役所と地域がよりよい信頼関係をつくっていくには？
- ・ 地域に価値を生み出す協働の仕組みとは？
- ・ 地域で多様なかかわりあいの生まれる、適度な距離感のコミュニティや居場所とは？
- ・ 日野のことを好きと言える人を増やすには？
- ・ 変化を前向きにとらえ、自分のものにするには？
- ・ デジタルでみんながもっと便利になり、コミュニケーションを深めるには？
- ・ 自分の知らないものにもっと出会えるには？
- ・ 次世代につなげていきたい暮らし(サステナブルな暮らし)を実現していくには？
- ・ 自然を楽しみ、普段の暮らしをもっと豊かにするには？
- ・ 未来へのやさしさを誇らしいと思えるようにするには？
- ・ やりたいことが実現しやすくなるまちにするには？
- ・ 必要なものを自分たちでつくりやすくするためには？
- ・ 自分に合った関わり方を見つけやすくするには？
- ・ 自分らしいと思える暮らしに近づくには？
- ・ 働きやすく、働き続けられるまちを実現するには？
- ・ ちょっとしたことが持続できるようになっていくには？

## ③ 行動指針(問いを考える際のヒント)

これまでの日野を作ってきた人の良いところを基に、2030年に向けて暮らし、地域活動、市役所のそれぞれの現場において、大切にしたい指針となる価値観をキーワードとしてまとめました。日野に住まう人、関わる人にとっても新たな価値となり、このまちに暮らしている良さを外に発信することを通して日野の良さを再認識し、より良い未来をつくる推進力となるものです。

### ■未知をおもしろがる

(定義)

未だ知らないことや人を知れる・学べる機会があり、<sup>楽しむ</sup>楽しみながら<sup>新しい価値を創り出している</sup>新しい価値を創り出している。  
(日野で起こっていること)

学生サークルなどのボランティア活動などが継続的に行われており、地域にとっても貴重な資源

---

<sup>8</sup> 楽しむ。常用外ですが、自分自身の気持ちや思いから生まれるたのしい状態を表します。自分がより満たされている状態であることを表現するため、この字を当てています。

であるとともに、ボランティア本人にとってもここでの出会いが他者のことを理解する機会にもなっています。一部の企業では生活の中の課題と結びついた取り組みを模索するようになってきました。社会の中にどのような課題があるかを探索するため、住民や地域団体、学校、行政などと連携した活動や実験的な取り組みなども行われています。このような他者をつなげる活動は市内の社会福祉法人や地域団体、行政がコーディネートしているほか、連携の受け皿にもなっています。

学びの場では年齢に関わらず学びを深めるために地域や社会との連携が進められており、SDGsをテーマとした取り組みも始まっています。

## ■ごちゃまぜ<sup>9</sup>の場を増やす

(定義)

立場や世代の異なる人々が分け隔てなく混ざり合うことができる“地域の交差点”とも言える場が増えていく。

(日野で起こっていること)

市内にはさまざまな居場所と魅力的なキーパーソンがいます。キーパーソンが橋渡しをしていくことで、自然と社会参加の機会や役割が生まれています。また、さまざまな属性を持った人が集まり、個々を認め合いながら新しい発想やイノベーションのきっかけとなるような取り組みも始まっています。年齢や肩書きに縛られず気軽に参加でき、ゆるやかなつながりを持てるような場が求められています。

また、障害の有無やジェンダー、認知症など無意識の偏見がある中で、それらが普通のことになっていく未来を目指した場づくりが行われています。

## ■自分たちでつくる

(定義)

必要なものは自分たちでつくり、共感する人を徐々に増やしていく。

(日野で起こっていること)

地域の中で、理想のライフスタイルを実現するためにスキルや知識を生かし、チャレンジをしている人が増えています。そういった活動をしている方が主体となり、自分の得意なことや好きなことなどを共有する機会や場も増えつつあります。

地域の中では助け合いの仕組みがあり、市民相互のお互いさまという気持ちが循環していくことを目指した取り組みが行われています。

## ■次の世代につなげる

(定義)

自分のしていることがその時々で形を変えながら続いている。

(日野で起こっていること)

---

<sup>9</sup>石川県金沢市にある福祉拠点を核とした地域づくりを行う「シェア金沢」において実践されている考え方。人や建物をサービスによって「分ける」のではなく、普段の暮らしと同じように「ごちゃまぜ」にすることでさまざまな方が関わり合う機会を増やし、自然な社会参加を実現することを目的としている。



市民は身近な環境についての意識が高く、環境の保全や自然保護だけではなく、市民協働や市民活動、生涯学習分野などでは、自然を生かし、親しむ取り組みやアクティビティとして楽しむこともあります。また、ごみ改革によって市民のごみへの意識も高まっており、2021年度には同規模自治体における廃棄物量が全国で2番目に少ない自治体となりました。

地域の中で、さまざまな子供たちの受け皿として、いくつかの有志のコミュニティが生まれています。そういったコミュニティと意思のある個人や福祉団体、一部の企業などがつながり、地域全体で将来世代を育てていこうという動きがあります。

一方で、市民の行政への期待や依存度は高まっており、2021年度に実施した市民意識調査の行政への依存度を図る項目では、2010年度と比較し、約8%増となっています。

## ■自分らしく働き続けられる

(定義)

長い人生の中でも自分らしく社会に関わり続けることができる。

(日野で起こっていること)

みまられるだけでなく子どもをみまもりたい、というシニア層や、平日に活動できる現役世代が活躍しています。家事や育児を手伝える人と手伝ってほしい人をつなぐ仕組みがあり、講習や活動が盛んに行われています。自分らしくビジネスを始めたい、アイデアを形にしたいという人たちの活動を後押しするビジネスプランコンテストやチャレンジショップなどの取り組みがあるとともに、同じ思いを持った方たちによる新しいつながりが生まれています。また、空き家に関する取り組みではオーナーとのマッチングや資金調達などで、アイデアの具体化を支援する環境も整ってきています。

## (4) 未来に向けたタネ

ここまで、ありたい姿や問い、行動指針を確認してきました。この基になっているものはタウンミーティングなどで得られた市民・職員個人の思いであり、個人の思いがビジョンの原動力にもなります。ここで寄せられた思いを記載します。

### ① ヒノタネタウンミーティングでの問いと問い

問い あなたが思う2030年に「こうなったらいいな」「こんなことに取り組みたいな」という日野への願いは？

- ・ やりたいことができる！自己実現率NO1のまち。”ワクワク”するまち
- ・ 2030年以降にもSDGsの活動の場を続けて増えてほしい→さまざまな人に活動をしてほしい。
- ・ 画期的な意識の変化、変わっていく社会に適応する市民の能動的な変化の取り組み
- ・ みなさんが”自分ごと”として暮らし、交流し、安心できるまちに！
- ・ スキルや思いをシェアしながら暮らしを創っている
- ・ 誰でもいつでも自分の想いをもとにデザインできるように
- ・ 誰でもいつからでも自分の想いをもとにデザインできるように

- ・ プロセスデザインとビジュアルデザインを市民の手で！
- ・ やりたいことを実現できる場所・環境
- ・ 一人一人が自分らしく生きることができて自分の思う幸せを他人が受け入れられる街
- ・ 自然を活かした産業・ビジネスを！！グランピング、BBQ 場、キャンプ場
- ・ 全国レベルのブランド野菜をもっと増やせるような土地活用
- ・ 公園や道の花壇が食べられる木や畑へ
- ・ 土方歳三資料館のポスターを駅に貼る
- ・ はかり売りの商店がいっぱいある
- ・ 新撰組で町おこしをしてほしい(多摩どうぶつ園等でも)
- ・ 空き家を活用したスタートアップ企業支援
- ・ みんな住みやすいシェアハウス
- ・ 特産物がほしい
- ・ 学生がたくさんいるので学生が住みやすい安心の街になってほしい
- ・ 他の市や県との交流が活発であってほしい
- ・ 子育て、高齢化社会に、希望の街のトップランナーの手本を日野市から発進！
- ・ 子育てのしやすい街のまま
- ・ 安心して死ねる社会
- ・ 高齢化対策市民満足度日本一!!
- ・ 子育てしやすい環境を整えるといい
- ・ 高齢者1人を2.5人で支えるのは大変だと思ったので税金を有効活用して負担を減らしてほしい
- ・ 保育園を増やしてほしい
- ・ 年齢を重ねても、働く場所がある街(元気に)
- ・ 病院に行く人がもっとも少ない街に
- ・ 育児など住みやすいような街であってほしい
- ・ みんな知り合い
- ・ 年齢関係なく参加できる場所を考え、作りたい
- ・ 誰でも地域のネットワークに自然に関わっているようなオープンな街であってほしい
- ・ 老若男女が気楽に交流できる場がある
- ・ 地域の人同士で楽しく交流できるコミュニティスペースを作る
- ・ 街の人たちとの交流の場が増えてほしい、お祭りなど。
- ・ 誰でも気軽に集まることができるスペースがほしい
- ・ 伝統文化の継承
- ・ たくさん人を呼ぶために家族向けの施設を増やしたりイベントを作してほしい
- ・ 人々が仕事とかに縛られず、素のままに関われる、話せる、そんな場がほしい
- ・ 年齢や性別など、様々な壁を越えた交流ができるまち！
- ・ 時間をつぶせる場所があふれている
- ・ 今と変わらずお祭りができる

- ・ 綺麗な自然を維持するために、地域の人たちでゴミ拾いなどボランティア活動  
→地域交流にもなる
- ・ 個性を發揮できる場を作って楽しく交流していきたい
- ・ 日野市にとって環境問題も大切ですが、今一番大切なことは、老若男女、年代を超え、人と人の輪を作ることが最大の課題です。同時に団塊の世代に注目！
- ・ 日野は地域の祭りが多い  
→地域の人たちの交流が多い→日野特有の祭り→残したい
- ・ 素で子供も大人も遊べる場を作りたい
- ・ 様々な個性、考え方を共有できる場がほしい(年齢はできるだけ幅広く)
- ・ 地域の人と気軽に繋がれる場所がほしい
- ・ 地域でのつながりを深める
- ・ 定期的に世代、肩書フリーの語り合いができればいいですね!!
- ・ 様々なイベントを開催して街や人々を盛り上げたい！明るい
- ・ 日野市の若い人を増やして高齢者とのかわりを増やしたい、明るい高齢者も若い人も活気のある日野へ
- ・ 大人と子供が人として関われる場所
- ・ ハードも大切だけどソフトの気持ちを大切に話し合いできる街
- ・ 日野に集積しているものづくりが得意な大企業とスタートアップ、大学が英知を結集して太陽光と水から人工光合成で水素を作り出す技術が実用化されること。さらには空気から飲み水を取り出す技術が実用化されること環境にも優しいし、化石燃料を取り合って国同士が争うこともなくなる
- ・ もっと川で遊べるまち。川のごみを減らす
- ・ 息子がボーイスカウトに参加し、多摩の木の立ち枯れやいろいろな問題を知ることができました。日野の自然がいつまでも大切に守られるような生活をしていきたい
- ・ 多摩川の環境を整える
- ・ 自然・川と緑、清流、そして農地を最大限活用した川の駅、農の駅による家庭菜園収穫物でも販売可能にし且つ収穫品の物々交換を可能にした市民交流型直売所、直売スペースが出来たらな！耕作放棄地や税負担物納地を市民等に生産緑地並み負担で貸し出し出来たら緑の減少、農地の減少に結びつき強いては市民活動の強化につながるのでは！
- ・ 農地は守っていききたいね
- ・ 持続可能な世界を皆で考えて行動する日野であってほしい
- ・ 浅川付近にキャンプ場を作ってみたい
- ・ STOP、地球温暖化、CO2 を排出しない生活をする！
- ・ 緑がたくさん、川や水がきれいなマチ。ゴミが増えない街。子供が遊べる場所が増えるといいな！
- ・ 食料自給率を上げるために地産地消を進めていく
- ・ 環境に配慮するが当たり前の社会
- ・ 恵まれた自然を守る。何かの価値に。開発よりも大切に

- ・ 程久保川をもっときれいな川にしたい。高幡地区にも市立病院があるよと思う
- ・ 建物ばかりじゃなくて、自然もたくさんあってほしい
- ・ 土地の使い方を見直して環境を守りつつ日野をより賑やかな街にしてほしい
- ・ 緑を大切に、古い建物などを大切に、環境にやさしい町づくり
- ・ プラスチックの代わりになるものが安価で作られるようになるといいな
- ・ 環境に気を配りながら更に市を発展させてほしい
- ・ オーガニック給食
- ・ 癒しの”水都”を目指して、一次産業の見直しを
- ・ 自然に恵まれた良好な住環境の形成、確保
- ・ 土手の草を刈ってほしい
- ・ パーマカルチャーをみんなで学ぶ
- ・ 自然資産を守り、活用して、市民が楽しめる体験ができるまちに!!
- ・ プラスチック製品がなくなったらいいな
- ・ 今まで以上に自然が多くても利便性がある日野市がいい
- ・ オフグリッド電力にチャレンジ
- ・ 川や自然が守られますように！
- ・ 常に環境のことを考え、無駄のない生活を皆さんで取り組む
- ・ 自然や景観の保護
- ・ 公園は食べれる木で埋め尽くされた公園になる
- ・ もっと3Rの取り組みが進んでいってほしい！リサイクルのところをたくさん置く
- ・ 環境推進都市、日野をさらに魅力あるまちに育てるのは私たち一人ひとりです。日野プライドを育てよう!!
- ・ Think Globally, ACT Locally, Beyond the Generation!
- ・ 地球規模で考え、地域から世代を超えて活動しましょう！かけがえのない地球を守るためアクション、行動することからしか始まらない
- ・ タイムマシンができて黒歴史は変えられない。私たちこそ歴史の一部！だから行動するのは今！
- ・ 自然を今までより豊かに
- ・ コミュニティガーデンが各中学校に存在する
- ・ 持続可能な社会の実現のための教育が充実している。
- ・ アサーティブコミュニケーションを学校の授業に取り入れる
- ・ 学ぶ機会の平等
- ・ 英語教育に力を入れる
- ・ 小中学校でお弁当の日を実践
- ・ シビックプライド(日野が好き！)
- ・ いつか、住みたい街は日野市と思われる、すてきな街に
- ・ 日野の知名度をあげたい
- ・ だれにでもやさしいまち！

- ・ 日野に住んでいる人皆が「日野に住んでいて良かった」と思えるまち
- ・ 今暮らす人が住みやすい、暮らしやすさ。景観
- ・ 18 時には家族みんなが家に帰ってこられるまち
- ・ 東京といえば「日野」って感じで有名になっている町
- ・ ゆる～く、のんびり、たのしく
- ・ 人が増えて活気ある都市になってほしい！
- ・ 行った人から「日野市って面白い！」と言ってもらえる町。日野で元々ある特徴を活かしたり新しいことにチャレンジしたい
- ・ 住みやすい街、みんなが思いやりをもって....
- ・ また日野に戻りたいと思える町
- ・ よりよく暮らしやすい街になりますように!
- ・ おしゃれな人が住んでいると評判の街に
- ・ 「子ども、障がい者、弱者にやさしいマチ」「クリーンな日野」
- ・ 子ども達が未来に希望を持てるまちになると良いですね
- ・ 子ども達のパワーが本当に未来。プラスチックを減らし動物たちと共存していける、そんな気持ちにしてくれる取り組みだと思いました
- ・ 子どもが遊べる場所がたくさんある町であってほしい！
- ・ 子どもを大事にするまちづくり
- ・ 公園など子供と遊べる場所が多くあるといい
- ・ 子供の貧困を無くす
- ・ 子どもを大事にするまちづくり
- ・ ムダゴミを減らす
- ・ ごみをなくそう!!
- ・ 2 位はすごい！1位になっていますように、ゴミ減らそう
- ・ ゴミが少ないのは継続した方が良いと思う
- ・ ゴミが減ってきれいなまちにしたい
- ・ ゴミのないキレイな町になってほしい
- ・ 紙ごみ減らしたい。プラスチックも
- ・ 寛容な社会同調圧力のない社会
- ・ 障害のある人がもっと生き生きと暮らせる街になってほしい。多様性をもっと認められるように
- ・ 小中高で特別支援学校や他校との交流を続けてたくさん増えてほしい。→一緒に一つのことをしたりなど
- ・ 公共交通に乗るときユニバーサルデザインの気持ちで誰でも手助け
- ・ 互いに理解のある社会
- ・ ジェンダーも年齢も経験も関係ない、それぞれがそれぞれを”活かせる”街
- ・ スロープをたくさん作ってほしい
- ・ 気ままに歩ける変化に富んだ道(路)

- ・ 誰でもトイレ、いろんな視点で意見出してもっとユニバーサルデザインに
- ・ 空き家を活用したタウンフォームでレタス作り。障害者雇用。
- ・ みんな住みやすいシェアハウス
- ・ 車椅子スペースの充実
- ・ 今よりもバリアフリー化が進んであたりまえになってほしいです
- ・ 団地周辺にも経済や利便性のある町→コンビニ、坂の整備、高齢者にも優しい
- ・ 変化のあるようで変わらない。でもなんとなく利便性がよくなってる。わけがわからない街
- ・ 2030年、そして未来へ”贈る”という思い!!
- ・ 焚き火で人が集まる場所を探す
- ・ トミカショップほしい
- ・ 大きな街(立川、八王子)にはさまれた「ニッチ」なまちづくり
- ・ 高幡不動で心洗われる
- ・ 東京都の真ん中にありながら、周囲に感化されない「マニアック」な街
- ・ コロナが早くなくなりますように、風邪になりませんように

## ② 職員向けヒノタネタウンミーティングでの問い

問い 今、あなたが打破したいことは何ですか？

- ・ やりたいけど人がいない施設が古い、でもお金がない地域の人々に任せられる仕組みができていない事業をやめることへの抵抗感がとても強い職員も市民も新しいことへの投資もできない悪循環
- ・ 未来への投資
- ・ 破綻の回避・膨張の停止・出口戦略・幸せを感じられる生き方・手の中にある思い切った断捨離  
→古い価値観から今に適した生き方への脱却
- ・ 増大し続けるサービス需要⇔減少し続ける資本施設の老朽化⇔利用者の生活維持未来に巻き返しを生むための育成(教育・産業への投資)
- ・ 組織として協力(縦も横も)しあえる体制をいかにして構築していくか
- ・ CO2 排出量削減 46%
- ・ 市民と直接話す場、フィールドがない
- ・ 市役所職員間の連携
- ・ 情報共有、組織の壁、まちづくりの担い手
- ・ 庁内各部署が持っているデータの共有がうまくいかない
- ・ 必要な方に市の伝えたい情報を届けられていないこと
- ・ 役所に来なくてよい行政サービスの提供(オンライン申請、自動化・・・)
- ・ 手続きなどのデジタル化法人誘致(商業施設含む)
- ・ 役所からの情報提供が下手
- ・ いろいろやっているのに「そんなの知らないわよ」と怒られる
- ・ 40年間、働ける職場にしたい

- ・ 不当なクレームの撲滅(一個人の身勝手な主張や不満の解消のために仕事の時間を取られ、市民のための仕事ができない)
- ・ 予算がない→削減に傾倒して業務がストップすると職員のやる気につながらない
- ・ コロナ禍で閉店しているところが多い／飲み会が減ってる
- ・ 日野駅にエスカレーターがない→JRの中で序列厳しい？
- ・ 職員のつながりが変化してる。他の自治体の人知らない、職員が誰だかわからない
- ・ 市民と直接話す場、フィールドがない
- ・ 市役所職員間の連携
- ・ 行政の役割のスリム化多くのことに行政が関わりすぎる、過多
- ・ 自分の経験、技能を提供したがつている市民は多い。その結果、技能を持つ市民が収入を得られるようにしたい。
- ・ 高齢者の居場所(様々なタイプのもの)がさらに必要になってくる
- ・ 資産運用を気軽に学べる市民塾(大人から子どもまで)があるといい
- ・ 65歳からの社会の身の置き方を考えていく(フレイル予防から生きがいへ)
- ・ 現役世代が忙しいまちづくり、活動の担い手の高齢化・固定化⇔子供の参加イベントなど楽しみができない、制限されているお客様化、マンネリ化、情報過多、均一化(まちとしての魅力):チェーン店が増、個人店が減とは
- ・ 草刈り・清掃
- ・ 市内の賑わい創出(日野市内での消費活性化)
- ・ 街中に人をあふれさせる駅前なのにマンションしかない特徴的なお店が減っている、少ない
- ・ 街並みがワクワクしない→基本的に変わり映えがなく面白くない→大型商業施設やでかい公園等〇〇
- ・ シビックプライド場づくり
- ・ シビックプライドを生み出す何かが足りない
- ・ 市内小売業、個人事業主の販路拡大
- ・ 日野ブランドの構築、日野プライドの復権、市民が誇りを持って住み続けられるまち
- ・ 都市計画まちづくり
- ・ 日野自動車の跡地
- ・ 中途半端に開発されてつながらない道路
- ・ 無駄な業務の削減(残業の減)
- ・ やったらやめられない行政の事業
- ・ 一部地域への人口の集中子育て介護をもっと身近に
- ・ 空き家(活用)の先駆者住みやすいまち
- ・ 学校の先生の質の違いにより児童・生徒への教育提供が統一されていない※義務教育担任制を踏まえて
- ・ 市内で子連れでどうやって楽しめばよいかかわからない。持ちネタが少ない。市外に行ってしまう
- ・ 放課後の安全で自由な子供の居場所の充実
- ・ 子ども(小中学生)と大人が同じ目線でまちをつくる。変えていける動き、気運をつくっていき

たい

- ・ 子ども関係の制度における所得制限の廃止
- ・ 地域の移動手段の充実(坂道が多い、必要な方の外出機会の確保)
- ・ 有効な情報の取得方法

問い 市民向けタウンミーティングでの声を踏まえて、市民や民間企業、大学など日野市を取り巻く人々と一緒に取り組みたいこと、考えたいことは何ですか？

- ・ みんなで使う小中学校って、どんな施設？
- ・ 市の職員に求めるもの、こうあってほしい
- ・ 参加者が直接決める市事業
- ・ 点字ブロックがなくてもバリアフリーな社会を作りたい
- ・ 日野の目指す姿としてみんなで共有できる価値(大事にしていきたいこと)
- ・ 日野市を越えたまちづくり
- ・ 子育てにかかる出費をゼロにする方法
- ・ 日野の魅力発信
- ・ 住んでみたい街に選ばれるには？
- ・ 2030に向けて一人一人(自分)ができること
- ・ スポーツの力をまちづくりに。
- ・ 学習成果を市民に提供し、収益生じさせる体制を気楽にできる環境づくり
- ・ 欲しい情報を欲しい人に届ける仕組み
- ・ 維持ではなく、減速でもなく、変えて超える社会課題
- ・ マニアックで面白そうなテーマ
- ・ 未来の自分や子孫に何を残して、何を捨てるか
- ・ おじさんの居場所づくり
- ・ 世代を越えた居場所作り
- ・ 日野を学生が魅力を感じるまちにする
- ・ 休日に家族で遊べるスポット
- ・ 公務員と副業
- ・ スキルや思いをシェアする場づくり、仕組み
- ・ 公共施設の利活用
- ・ 魅力的な空間の作り方
- ・ 何かやりたい!でも自分からはムリ。トップになってくれる人募集!
- ・ 都市農業の持続可能性を本気で考えてみたい
- ・ 市の財政
- ・ 死ぬ前も安心な社会、死ぬときも安心な未来
- ・ 親が考えるのじゃない、子どもスタートのサービスは
- ・ リアルなまちの繋がりは、デジタルを超えた力になる



- ・ ハードからソフトに、モノで解決しない行政サービス
- ・ コミュニティ、繋がりを育てたい
- ・ 子どもと日野市で楽しむ情報誌など
- ・ 関わるきっかけ、スタート作り
- ・ みんなとデジタル化
- ・ 年齢を重ねても働く場所がある街
- ・ 未来に残したい日野の魅力
- ・ 自然を楽しむ
- ・ 市役所がやっている事で、いらないと思うこと。
- ・ 地域の方々がより活発に活動するために必要なものはなんですか？
- ・ 引っ込み思案でも街に参加できるきっかけ
- ・ 活動したい人を探し出す、育てる仕組み
- ・ 河川や丘陵地の活用から第一次産業の復活を本気で考える
- ・ 中学生の起業支援
- ・ 日野への移住に一番必要なキーワード
- ・ 日野市の樹木の更新
- ・ ニッチな日野
- ・ 日野市の魅力、価値のある資源って何ですか？
- ・ 日野市が賑わい活性化するには？
- ・ どのような方法で日野市に人を呼び込むか？
- ・ わくわくするお店
- ・ 自然体験できる場所
- ・ 誰でもいつからでも自分の想いをもとに実現できるように
- ・ 自分たちで出来る二酸化炭素削減策
- ・ 日野でデートに使える場所
- ・ 身分や年齢等に関わらず、色んなテーマで気軽に意見交換ができる場が増えたら良いなと思います。
- ・ スマホ市役所
- ・ 住みやすい街の実現のためには？
- ・ 高齢者のデジタル化対応
- ・ 日野市の魅力向上、魅力再発見のしかけづくり
- ・ 子ども発意で大人が本気で一緒に地産地消(食水エネルギー)を、どうやったら持続できる？
- ・ 楽しいコミュニティをどのようにして活性化できるか？
- ・ 誰もが必要な教育を受けられるまちづくり
- ・ 新しいモビリティ(交通サービス)
- ・ どんな企業に来てほしいか
- ・ 情報の共有
- ・ 日野の好きなどこ

- ・ よく言う「三方よし」な取り組みを考えたい
- ・ 若い世代との交流の場づくり
- ・ 何があれば日野市に住みたいか？何がなくなったら日野市から出ていくか？
- ・ ウェルビーイング市民プールで釣り堀
- ・ まちおこし
- ・ 遊休地や施設の活用
- ・ 特定の分野だけではない
- ・ (日野の)外からここに来てもらう「賑わい」
- ・ 日野はくらしの場
- ・ 内発的に発生していく「賑わい」
- ・ 改めて日野市の職員としてみなさんと考えていきたいことは、
- ・ 日野の目指す姿としてみんなで共有したい価値(大事にしていきたいこと)は？
- ・ 何がなくなったら、何が変わったら日野市から出ていく？
- ・ 日野市で街中のにぎわい、歩いて楽しい街を実現するには？
- ・ 日野市にどんな交流の場、使える場所があったらいいか？
- ・ 日野市にどんな企業、お店があると(増えると)いい？

# 日野地域未来ビジョン2030

## しあわせのタネを育てあう日野

使うものも買うものも、意識しなくても環境にやさしいまち  
 共に創る、地域情報が飛び交う賑わいのまち  
 環境にやさしく、住むことが誇りになるまち  
 プライベートと仕事充実し、職住近接の刺激を感じられるまち  
 顔の見える、一人ひとりが自分を活かし、認め合う共創のまち  
 適度な距離でいるんな人が好きなことをやっているまち  
 新しいものも古いものも取り入れながら、日野らしさが続いていけるまち  
 ローカルな出会いから好きを発信できるまち  
 デジタルで利便性アップ、職員の顔が見える笑顔の市役所があるまち  
 軽やかに集う居場所、コミュニケーションのあふれるまち  
 知ると思わず参加したくなる〇〇があるまち  
 未来へのやさしさを誇りに、誰もが安心して学び・学びあい、歩んでいけるまち  
 未知をおもしろがり、探求できるまち  
 まちと企業が結びつき、暮らしの中からイノベーションがうまれるまち  
 心地よい居場所、住み続けたいまちを自分たちでつくるまち  
 誰かが当事者として考え、意思決定に参加できるまち  
 自分と他者が生きている、生きてきた背景を認め合えるまち  
 三方よし!の関係から新たなコトが生まれるまち  
 水やみどり日々を豊かにしているまち  
 自分の暮らしの背景を理解し、暮らしに必要なものをつくれるまち  
 自分が大切にしたい日野】タネから芽吹き、咲くハナ  
 何があっても、何とか働き続けられるまち  
 暮らしの余白が価値を生み出すまち  
 居場所に集う人も集わない人も、認め合えるまち  
 未知をおもしろがり、探求できるまち  
 まちと企業が結びつき、暮らしの中からイノベーションがうまれるまち  
 誰かが当事者として考え、意思決定に参加できるまち  
 水やみどり日々を豊かにしているまち



400のタネ (WS)

4,200の  
コエ  
(ヒアリング・アンケート)

【共有したい行動指針】

**基本的な考え方**

これまでの日野のまち協働・共創の取組み × 多様性と包摂性 尊厳の尊重 人生100年時代 ひと(くらし・しごと)中心 SDGsの考え方

今日のような時代の転換期においては、  
 ・自ら考え、道を見つけて歩んでいくこと  
 ・変化や脅威、時代の要請に対して、しなやかに対応していくことが大切

**問い**  
 私たち自身が  
 ありたい姿に近づくために  
 一緒に考えていきたいギャップ

**日野のいま**

出生数が死亡数を下回る傾向は続く(自然減)  
 他地域から転入は多いが減少傾向(やや社会増)  
 高齢者数や高齢化率は増加傾向  
 外国人住民の数は増加傾向  
 製造品出荷額が半減  
 農地面積は減少傾向  
 地縁組織は加入率が低下しているがお互いさまの文化は残っている  
 環境配慮への関心の高まり

## 市役所はどう動くか

ここでは、これまでの検討をふまえた上で、日野市役所において取り組んでいく方向性について検討します。具体的な取り組みなどはビジョンでは設定せず、方向性を提示します。

これからの地域づくりの大きな目的は幸福感(ウェルビーイング)を高めることにあります。市役所も個別政策、問題対応型の政策づくりの段階から、住民自身が地域の中でつながりを持ち、社会参加し、緑のある環境で過ごせることが、自己の受容や肯定感にもつながり、健康にも幸福感にもつながっていくことを認識し、地域をあげて取り組んでいく政策づくりの段階になってきています。日野は一つの公園のようなまちという点では、ウェルビーイングを手作りできる可能性を持ち、強みにもしていくことができる環境にあると言えます。また、手作りしていくことがウェルビーイングにもつながっていきます。

市役所の役割も変化していくでしょう。これまでの足りないところの整備だけでなく、積み上げてきた良いものをいかにメンテナンスしていくのか、さらに参加型で市民がつくっていく機会や環境を整えていくのか、ということもますます大切になってきています。それらがこのビジョンのバックグラウンドにもなっています。

日野市は、「諸力融合」をまちづくりのコンセプトとして掲げ、市民、企業、大学、行政という多様な主体者が、対話の場を持つことで互いの距離を近く保ちながら、それぞれに活動しています。市役所としても相次ぐ工場の移転に直面し、既存の産業振興の考え方にとらわれない産業活性化策として「生活課題産業化」を模索しています。これらは、ベッドタウンとして発展しながらも、住宅地だけではなく、製造業の拠点や研究開発拠点、大学なども数多く立地するなど複合的な要素を残しながら発展してきたまちの特徴や系譜でもあります。

こうした日野市だからこそ、課題とリソースを持ち寄ることで、新たな価値が生まれていく可能性があります。日野市は、2014年には「人口バランス・定住化促進戦略」「産業立地強化・雇用確保戦略」「ヘルスケア・ウェルネス戦略」の3つの主要な戦略を策定した上で、2015年の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」において、ポスト・ベッドタウン(生活価値共創都市)という都市像を掲げています。

これは、これまで人口増加を前提として分断することで効率的に取り組まれていた職・住・育・遊などの機能や空間が、人口停滞・減少期においては課題となり得ることを指摘し、分断していたものを複合的・一体的に捉え直すことにより、これからの地域に即した持続的な社会モデルに変えていくというものです。

こうした取り組みは2019年には東京都で初めてのSDGs未来都市にも選定されたことにもつながっています。地球規模の変化が地域にも影響を及ぼしている中で、グローバルな社会の中に日野というローカルな地域があるとともに、日野に住まう人もグローバルな社会につながっていることを改めて認識する必要があります。

大きな背景を踏まえつつ、ベッドタウンからポストベッドタウンへの転換を進めつつある日野市だからこそ選択できる可能性について記載していきます。

## ■ 持続可能な地域づくり

市民、企業、行政が対等なパートナーシップをもって地域づくりを行う社会へ転換し、地域の資源、リソースを活用した生産と消費(地産地消)による循環型の取り組みの実現などが行われます。

- ・SDGs など社会の関心が高い項目の文脈を理解
- ・これからの成長性に注目し、市民、団体、企業などが参画
- ・環境社会に配慮した商品・企業を積極的に選択・支持できるようになる
- ・さまざまな学びの機会の増加

## ■ 諸力融合のまちづくり

日野を含む多摩地域の人口は約420万人。約358万人の静岡県より多く、多摩地域を一つの県と見立てた場合は全国で10番目となります。こうした地域特性を生かしながら、リアルな生活現場からの課題(生活課題)を、多様な主体がパートナーシップを組み、協働、共創しながら、自分たちの力で解決していく取り組みが行われます。

- ・パートナーシップによる地域課題解決の発想の導入
- ・パートナーシップ実現のための環境整備
- ・3つの連携の促進(広域での連携、官民での連携、庁内での連携)

## ■ 変化に対応しやすい仕組みづくり

市民も対等なパートナーとして参画し、リーンスタートアップ<sup>10</sup>型で、生活課題をさまざまな主体者とともに解決していきます。これまで日野市が取り組んできた「生活課題産業化」を推進するための対話の仕組みなどを着実に進められるようにしていきます。

- ・行政や企業、地域の認識共有
- ・地域資源の再評価
- ・複数年にまたがる支援制度、連携体制の確立

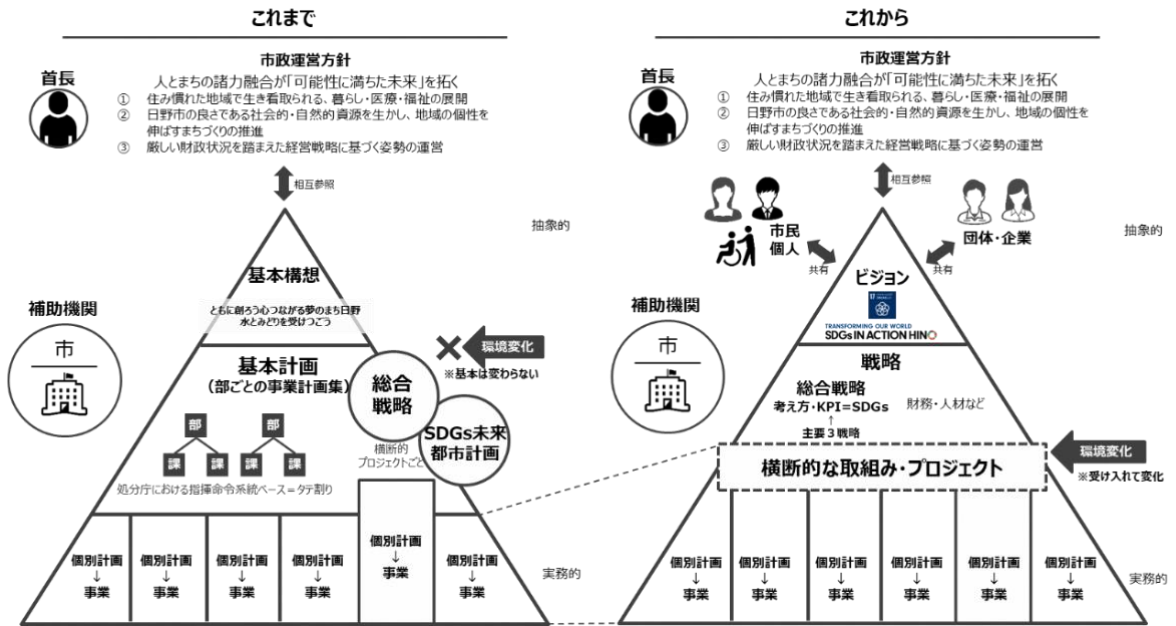
## ■ 一人ひとりが持続可能なライフスタイルを選択可能に

多彩な人材が、生活課題を共有し、企業や行政と対等な立場で取り組みに参画していきます。また生涯学習や教育との連携など、若者世代を地域づくりに誘う仕組みが整い、あらゆる年代層を通じた地域づくりへの参画が実現するために対話や学びの環境が整い、活動を促す場が整います。

- ・行政主体から地域主体への転換
- ・市民自身の手による参画機会の拡大
- ・ダイバーシティ&インクルージョンの促進
- ・あらゆる年代の参画

---

<sup>10</sup> 「無駄がない」という意味の「リーン(英語: lean)」と、「起業」を意味する「スタートアップ(英語: startup)」を組み合わせて作られた造語。コスト、時間をかけずに最低限の製品・サービス・機能を持った試作品を短期間でつくり、顧客の反応を観察し、改善を加えて製品・サービスを開発していくマネジメント手法のこと。



地域未来ビジョンの位置付けイメージ

## ビジョン実現に向けての推進方法

ここでは、パブリックコメント等の意見を踏まえて、ビジョンをどのように推進していくのか、フォローアップやレビューをどのようにしていくかを記載していきます。

市役所は、ビジョンを市行政の推進において活用することだけでなく、地域活動、企業など市内各地で、ビジョンで描かれた未来の実現に向けて「自分たちは何を大切に、今、何ができるか」を考え、具体的な行動を起こしていくことを通して、ビジョンの実現を進めていきます。

ビジョン活用の議論を、策定直後の時だけでなく、継続的に、活動・施策を新しく始める際や見直す際にも行っていけるように、ビジョン活用の推進役を増やす取り組みを進めていきます。

### ■ 市役所におけるビジョンの活用

社会や地域の状況が大きく変化している中では、市行政においても新しい課題や求められることが変化していくと考えられます。課題が起きる度に、その場しのぎの対応になってしまえば、中長期的な地域のありたい姿を実現することは難しいでしょう。日常業務や目の前の課題が、どのような未来につながるものなのか、どのような視点が地域力の向上につながるのかを考え続けることが市職員にも求められます。それには、今の取り組みが中長期的にどのような意味を持つのかを捉え直し、担当者の視点だけでなく、市民や社会の視点も理解し、これからの社会を見通す高い視座を持つことがカギとなります。

本ビジョンは、多くの視点を取り入れた上で作成しています。市役所における取り組みの検討の際には、ビジョンにおけるありたい姿や問い、行動指針などを踏まえて考えることで、今、何をどのように行うことが短期的な成果だけでなく、中長期的なメリットにもつながるのか考えていきます。また、政策的かつ横断的に推進していく取り組みについては、まち・ひと・しごと創生総合戦略などに位置付けて推進していきます。

### ■ パートナーシップによる推進

ビジョン実現に向けて、市役所と地域活動、地域企業は、それぞれが取り組むだけでなく、それぞれが自分のできることを進めながら補い合い、相互に刺激し合うパートナーシップで取り組みます。パートナーについては日野市内に限りません。地域内外やグローバルの動向を踏まえた上で、さまざまな分野で活動している持続可能な社会の担い手とも連携しながら、本ビジョンを地域アプローチによるSDGsと位置付け、その推進と併せて進めていきます。

### ■ フォローアップとレビュー

ビジョンの実現が進んでいるか、内容をより具体化する必要があるか、取り組みを更新していく必要があるか、などについては、第一にビジョンを使う人がそれぞれの現場で自発的に判断することを尊重します。ビジョンの基本的な考え方を大切にしながら、状況の変化や時期に応じて各現場で生じる課題に応じてビジョンで描く未来像をより具体化したり、内容を取捨選択したりして活用する

ことによって、各々の実情に応じて効果的に活用していくことが大切だと考えているためです。

その上で、市役所はビジョンからどのような行動が生まれたか、考え方や方向性がどのような成果につながったか定期的にレビューする機会を設けていきます。効果的なフォローアップとレビューとしていくために、市役所は以下の取り組みを探究しながら行っていきます。

#### ・モデルと利用イメージの提供

それぞれの現場でビジョンを自発的・主体的に活用していく際のヒントとしていただけるよう、市役所はビジョンを活用して各現場における取り組みを具体的に検討する際に活用できるツールを提供します。併せてツールの活用法のモデルをまとめて公開するとともに、それぞれの現場においてビジョンを活用しながら対話を推進するスキルを持つ普及・活用推進者(エヴァンジェリスト)を募り、増やしていきます。

#### ・アクション事例の集約

市役所や地域活動、企業などでビジョンがどのように使われているのかについては、ビジョンを使ってどのようなアクションが考えられたか、行われたかを蓄積していくことにより、正しく評価していくことが可能となります。そのため、ビジョンを使ったことによって生じた個々人の変化や考えられた取り組みをアクション事例として集約していきます。集約に関しては、デジタルツールを使った投稿フォームを活用していきます。

#### ・事例の考察

アクション事例において投稿される取り組みは多様な立場や場面で生じたものですが、同時期・同地域に同様のステップを踏んで記載されるものです。その特性を活かして、投稿された個々の興味・関心や取り組みの内容などを分類した上で、どのような取り組みがされようとしているのかについて、地域内外やグローバルの動向を踏まえた上で考察していきます。

#### ・事例の公開と更なる対話の推進

投稿されたアクション事例や考察に関しては定期的に公開をし、経年で蓄積していきます。また、ビジョンの中で共通の関心事や似たアクションを行う人同士が、年齢や性別、官民の区別などに関わらずに知り合えるような機会を提供していきます。オンライン上のプラットフォームなどを活用していくことを想定しています。

#### ・原則事項

これらの取り組みについては、既存の機会やプロセスを活用し、重複を避けて行われます。また、ビジョンの計画期間内においても、新たな問題の発生や新しい方法論の開発を考慮して改良を加えるとともに、ビジョンを使う人の負担を最小限にします。

また、個人や組織など、地域におけるあらゆる階層における自発的なレビューを妨げるものではありません。



## 変化が激しい時代において必要とされる行政計画とは何だろう？

ビジョンづくりはこうした問いかけからスタートしました。

日野市における計画の源流は1968(昭和43)年度の「日野市基本的総合計画」にさかのぼります。

当時は高度経済成長期の真っただ中であり、数年ごとに人口が倍になる時代でした。

このため、総合的・計画的に市域を開発していく必要があり、「総合計画」というものが生まれました。

それから半世紀後の今、ある程度の経済発展があり、個々人の幸せの形が多様化する中で、日野市というまちにおける総合計画の存在意義を考え直す必要がありました。

時間をかけて作られた分厚い冊子にも大きな意味があります。ですが、正しく立派な計画をつくることよりも、心に残るもの、これからの影響を与えられるものであることに重きを置きました。

行政の施策が列挙されている施策集ではなく、誰かと分かち合えるビジョンにしていきたい。

そのためにはこれからを意識したビジョンの開発が必要で、市役所だけでは実現できません。これが、「日野市(役所の)未来ビジョン」ではなく、「日野(という)地域(の)未来ビジョン」とした理由です。

そして、そのために一番大事なものは何かを考えると、ありがたい姿を出し合っていく必要性があると気づき、そこから何をしていくかを考えるきっかけとなる行動指針や問いが生まれていきました。

ビジョンの裏のメッセージは「あなたはあなたでよい」ということです。

行動指針や問いはまちづくりのためではなく、あなたが日野というまちに関わりながら充実して生きていくことに役立てていただきたい。

自分らしく生きるために日野というまちをうまく使いこなしていただくとともに、ビジョンについても自分ものとして、工夫しながら使っていただければ幸いです。

このビジョンは、多くの方のご協力・ご賛同のおかげでここまでたどり着くことができました。

この場を借りて、関わっていただいた多くの方に感謝申し上げます。

そして、今、これを読んでいるあなたが次の問いを考え始めることで、ようやく完成します。

あなたが思う2030年に「こうなったらいいな」「こんなことに取り組みたいな」という日野への願いは？

2023(令和5)年3月

日野市長 大坪 冬彦

## 巻末付録 ビジョンの使い方のヒント

2022年12月20日のヒノタネタウンミーティングにおいて実施したビジョンの使い方を解説します。必要なのは鉛筆だけ！ 自分一人でも、仲間と一緒にでも OK です。

ビジョンの行動指針や問いを手がかりとして未来志向のアクションをつくっていきましょう！

### ① 想像してみよう

2030年に「しあわせのタネを育てあう日野」が実現していたら、どんなことが起きているだろう？

### ② 今の自分達を考える

未来に向けて、今の自分たちの思い、できること、始めていることを考えてみよう。

### ③ 具体的な課題を設定する

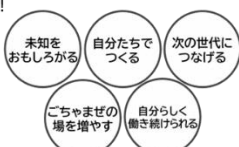
“ビジョン実現への問い”をヒントに、未来に向かって自分の現場で挑戦したい課題を定めよう。

### ④ 仲間を広げる

課題に共に取り組む仲間を広げ、多様な視点を持ち寄って、課題を多面的に考え、これまでと異なる解決策を考えよう。

### ⑤ アクションをデザインする

5つの行動指針を取り入れ、未来志向のアクションをデザインし、仲間と実践していきましょう。

しあわせのタネを育てあう日野 に向けて、何ができるだろう？	
<b>1. 【私たちが大切にしたい日野】</b> の 中で関心あること、実現してほしい と思うことは？	
<b>2. 現状はどうだろう？</b> できていること、新しい動き、もっと 良くしたいこと、変えたいことは？	
<b>3. ビジョン実現への課題は？</b> ビジョンを実現するために乗り越える、 変わっていく必要があることは？ (「問い」を参考に)	
<b>4. 私たちにできるアクションは？</b> ビジョン実現に向けてできることは 何だろう？「行動指針」もヒントに、 未来志向のアクションのアイデアを だそう！ 	

## 日野地域未来ビジョン 2030

策定日	2023(令和5)年3月
計画年次	2023年4月～2031年3月
策定	日野市
著者	日野市企画部企画経営課 〒191-8686 東京都日野市神明1-12-1 日野市役所